

子
美

11

東京農業大学畜友会

卷頭言

畜友会委員長 吉沢周司

学問には平坦な大道はありません。

そして学問の険しい坂道をよじ登る労苦をいとわない者

だけがその明るい頂上にたどりつく望みがもてるのです。

ふじみの
第11号
目次

巻頭言 畜友会委員長 鈴木 吉
自己宣伝というもの 畜産学科長 鈴木 沢

特集
ブラジル旅行より 畜産学科長 鈴木 吉
今年の学会発表から 講師 鈴木 沢

45年度卒業論文受賞作
*学 長 賞 御 門 恭 壽
*学 科 長 賞 大 門 恭 壽
*大日本農会賞 金 箱 繁 夫
*三 浦 賞 山 本 早 苗
*伊 藤 賞 大 島 壯 一
*西 川 賞 大 島 博

寄稿

大学における自由 佐 佐 木 修
畜友会に思う 卑 怯
畜友会のあり方 無責任 藤 修
19 18 17

青春とは何か 岡 田 裕 一
夏の思い出 退 屈 男
墮落した生活 力 丸 啓 一
畜産近代的に對する農協の在方の一考察 淡 谷 先 生
3 3 2 2 2 2
年 年 年 年 年 年
29 27 25 24 21 21

研究室便り

家畜繁殖学研究室	卒業論文題目	32	32	43	42
学 生 長	卒業論文題目	33	46	46	44
卒業論文題目	卒業論文題目	35	46	48	48
学 生 長	卒業論文題目	36	49	48	48
家畜衛生学研究室	卒業論文題目	36	50	49	49
学 生 長	卒業論文題目	38	51	50	49
卒業論文題目	卒業論文題目	40	51	50	49
学 生 長	卒業論文題目	41	51	50	49
飼養学研究室	卒業論文題目	41	51	50	49
学 生 長	卒業論文題目	41	51	50	49

東京農業大学畜友会規約
46年度畜友会行事報告
編集後記

自己宣伝というもの

畜産学科長 鈴木正三

世は正にあげてP・Rの時代である。この現象はあらゆる社会域に見る現象である。そして学生間にもこれを時々見聞する。これは自分の姿、自己の性格、思想の輪廓を自分を取巻く周囲に向って紹介宣伝し、自分という人間の正しい把握に努めるのであるからそれはそれとして肯定してよいと思う。しかしこれがややもすると過度に流れる危険があり、あまりにも積極的になり過ぎ過度の表現、P・Rとなってそれが変形したものの主張となる。所謂自己宣伝や背伸び現象となつてはた目もいやな浅薄にして泥土と嫌われる所以である。

史記にいわく、「桃李言わざれども下自ずから小みちをなす。」とか。けだし名言となつて古今に輝いているのは余りにも有名である。日本でも大学名をこれにあやかつているところもあることも周知の事実である。

この意味は今更賢言を俟たずむしろ蛇足と思うが一筆すれば次の通り。すなわち桃や李は春になると美しい花を咲かせ甘い実を実のらす。従つて人は敢えて招かずと

も自然えのもとに集つて来て、木の下は自然と小道が出来るようになる。人間社会でも全くこれと同様で、人徳の高い立派な人には自己宣伝、P・Rをしなくても自然と人が敬慕して集つてくる。行為、行動が立派でなければ如何に宣伝しても人は慕いよらない。人間はまず自己の人格、徳行が最も重要あるとするものである。高潔な人格の所有者こそその態度は謙虚にして慇懃である。自己宣伝やP・Rは心よしとせず常に反省して自戒している。誠に持つて奥ゆかしくも尊いものである。

斯様な感情は若い学生諸君には実感に欠けるかも知れない。しかし諸君がやがて学窓を離れ社会人となつた時は思い出して処世の糧として貫けば幸いである。

明け暮れ畜産技術、自然科学を迫り畜友会の学生諸君である。技術の奴隷となつて人格形成を怠らぬ様に、常に念願してやまぬ者である。畜友会諸君の円満にして健全な充実した学窓生活を期待している。

特集

ブラジル旅行より

鈴木正三

今度ブラジルのサンパウロ大学農学部獣医学部長の招請により特別講演のためブラジルの地を踏むことが出来た。八月五日羽田を発ち二十二日までの十八日間の短かい旅行ではあるが小生には全く未知の国であり、また所謂ブラジル大陸と概念づけられ日本とは総ての農業事情の異なる国であるので大きい期待をもって出発した。途中暑熱のロスアンゼルスに一泊、一路南下、グアテマラ、パナマを経て八月七日サンパウロに到着した。

サンパウロ大学獣医学部ではその病理学教室のProf. Dr. HEOLTOの歓迎を受けた。「家畜血液型研究の最近の動向」と題するSeminarは聴講者に果して理解出来たか不安である。しかし先生達とは充分質疑応答を繰り返した。経つて医学部遺伝学教室に案内されたが主任教授のDr. OTTENSOSERは既に停年退官され、後任教授からは非RIO CLAROの州立大学教養学部のProf. A. BUSCHINI、L. J. REBEIRAO PRETOの遺伝学教室のProf. WARWICK KERR, PIRACICABAのProf. Dr. ARISTEU MENDES PEIXOTOに既に連続手配しているので訪問する様にとのことであった。Prof. A. M. PEIXOTOはサンパウロ大学農学部畜産学

科の主任教授で、その農学部はPIRACICABAでありサンパウロ大学では最も古い学部である。獣医学部はサンパウロ市にある。サンパウロ大学は総て新しStyleの大学であるが、農学部は実に古く充実した古典的な感じのStyleをした大学である。そして南米大陸の農業開発のセンターとしての威容を示している。農学部にはインテリクチュアルの研究施設が今春設置され、最新の総て完備した研究所である。丁度ここに米国から教授を招きSeminar開講中であつた。PEIXOTO教授と研究打合せをし、同学部の附属農場の家畜も見学した。牛はZebu系統のものが多く、Neloreが多い。水牛も僅かではあるが飼養されていた。山羊は在来種といわれ、早速約三〇頭の採血を依頼した。家禽類では駄鳥などを珍らしいものが多い。なおこの農学部の遺伝学教室には東大の作物学教室出身の安藤助教授が勤務しておられ農学部構内を色々と案内してもらつた。

REBEIRAO PRETOの医学部遺伝学教室は主として解剖学を主体とした人類遺伝学の教室である。続いてRIO CLAROの州立大学教養学部長Prof. BUSCHINIを訪門した。この教授は南米の鳥類の血液型研究の第一人者で研究所を案内してくれた。特に鶏、キジ、ホロホロチョウを始め南米産鳥類の血液型を荳科種子の抽出液で分類している。その種子の数種を分譲してくれた。この研究所は自然林に囲まれた環境下にあり、鳥類なども自然に飛

来するものをそのまま Sample として使用すること
である。

これらの研究機関丁訪の途次、MATAO O IBEC Resear-
ch Institute を訪れ、Director O Dr. JOHN
N. V. BATMAN に面接した。この研究所は米国のロック
フェラー財団の援助により特に草地農業を研究の主体と
して運営されていることであるが、現在では余りそ
の活動が活潑ではなく、ブラジル各州より農業技術者を
集め研修をしていた。ここにも玉川大学出身の田中氏が
勤務していた。

八月十四日に退官された OLEIN SOOSER 教授を自宅に
訪れたが、八十才の高齢とは思えぬ程の元気な姿で小生
を連れて迎え入れ、人の血液型と家畜の血液型との関係
について話していただいた。同教授は世界的な権威で、
日本の古畑教授とも親しい間柄である。懐しい想い出話
に花を咲かせ数時間を過していられた。

大体の農学畜産関係の研究機関を見学したが、家畜血
清学部門では研究の発展はむしろ今後に期待したい状況
の様に思われた。このことがアジアから態々小生を招い
た所以でもあらうと考えた。

折角の機会であるのでブラジル畜産の実態を少しでも
多く把握する様努めた。サンパウロより約四〇〇Kmの高
原地帯に施業してゐる OTAVIO CARVALHO DIAS と
いう或る牧場主を訪ね、牧場経営の実態を調査した。そ

めそれぞれ捲土重来、大器晩成を期して活躍発展してお
られる。畜産学科の卒業生も多い。大陸に響く農大之歌、
懐しい一夜であった。校友各位の健康を祈つてやまなく。

今年の学会発表から

石 島 芳 郎

本誌に今年学会で発表した研究の内容を書くようにと
のことなので、発表順に要点を紹介させていただきます。

筆者の研究室では、家畜の人工妊娠や人工多胎の技術
開発の基礎的な面の研究を家兎・ラット、マウス、ハム
スターなど主に実験動物を対象に進めており、目下のと
ころ、研究用卵子を得るための過排卵誘起法は、ほぼ確
立させることができ、この方法で採取した受精卵子の保
存・培養の実験が開始できる状況にある。一方、過排卵
処理を利用して一腹の産子数を増加させる試みも検討し
ているが、このほうはホルモン処理後の妊娠が正常に起
りにくいというまういっていない。したがって現在は、
この点に関する研究に重点がおかれている。このほかに
新しく開発したエストロゲン併用過排卵誘起法の効果
の機序解明や実験動物自体の繁殖技術の改善にもメスを
入れている。今年は、こうした研究方向のなから、ハ
ムスターの過排卵に関するもの一編、家兎の発情調整に

の施業用地面積は三地域に分れ計四三二〇Ha、乳肉兼用
種 O CARACU 牛を主体とし約二五〇〇頭飼養、牧草は
耐寒性の AZEVEN を作付している。輪換移動放牧飼育を
実施してゐる。この様な牧場は科学的経営をしているが
一般では全く粗放経営で、広大な土地と天恵の自然草を
対象として自然のままに経営をやっているのが多い。従
ってその程度は日本に比較し一般に遅れているのが現
状であらう。大都市近郊では乳牛の飼養も多く、乳業工
場も整備されている。その機械設備はフランス製のもの
が多い。因みにブラジルの牛の飼養頭数は九〇〇〇万頭
で乳牛はその一〇%といわれる。サンパウロ郊外の世界
に有名な SWIFT 屠場を見学した。ここはシカゴの屠
場に次ぐ大規模なもので屠畜は総て牛である。Nelore,
G11 などの牛が多い。検査官はスペイン系の獣医が多
いとか。規模において肉牛生産国の屠場という感じが強い。
牛に次いでブラジルの畜産は養鶏が盛んである。特に白
系養鶏家の活躍が著るしい。ブラジルで有名な東山農場
を見学した。この総務主任の藤原氏に色々お世話にな
った。施業面積一〇〇〇Ha、乳牛 Holstein 種三〇〇
頭、コーヒー栽培、醸造の三部門が主なる経営部門であ
る。この日本酒は南米大陸唯一とか。農大出身の佐野
氏（昭和三十六年卒）が主任となって活躍している。
在ブラジル校友が八月十四日夜小生のため農大同窓会
を開催してくれた。出席者約三〇名、会長久万先輩を始

関するもの一編、過排卵家兎の妊娠に関連するもの三編
の計を発表してある。

ハムスターの過排卵に及ぼすエストロジオール注射の
影響

第五十九回日本畜産学会大会 四月七日、名古屋

この演題は、性腺刺激ホルモンによって過排卵誘起す
る際にエストロジオール注射を併用すると排卵数が増加
することが、すでに牛、家兎、ラットなどで知られてい
て、このことは内分泌学的にも、また応用面でも興味深
いのでハムスターで追試してみたものである。

ゴールデンおよびアルビノハムスターの成雌に、腫粘
液をみとめた日の午前十時に三十単位の PMS を皮下注射
し、ついで五十六時間後に三十単位の PMS を皮下注射す
る過排卵処置法を用いて、PMS 注射後二十四時間に種々
の量のエストロジオールを注射した結果、両ハムスター
ともにエストロジオールの投与により排卵数が増加し、
前者で一・五マイクログラム、後者で一・〇マイクログ
ラムの投与量が最もよいことがあきらかとなった。つい
で、ゴールデンハムスターに一・五マイクログラムのエ
ストロジオールを PMS 注射後種々の時間に投与し、注射間

隔による影響を検討したところ、経過時間が長くなるほど排卵数が増加することが知られた。これらのことからハムスターについてエストラジオールの併用が有効なことが判明した。

この研究のくわしい内容は、農学集報十六巻一号に印刷されているので参照されたい。

妊馬血清性腺刺激ホルモンによるウサギの発情調整

実験動物研究会 第六回研究発表会、

六月二十五日 東京

この研究は、家兎も不規則ながら発情に周期があつて、一群の雌を考えると発情がまちまちに発現するため、計画的に同じ日にすべての雌を交配させることが不可能な現状にあるので、これを改善する目的で計画されたものである。筆者は家兎の過排卵誘起の研究で PMS 注射された雌兎に発情発現が顕著であることを経験しているので、このホルモンを家兎の発情調整に利用してみた。十頭の成雌兎に四十単位の PMS を注射したところ、注射された雌は、その翌日発情が顕著に現われ、全例交配に成功した。これらの雌兎に交尾直後排卵を確実にするため HCG を静脈注射して分娩にいたらせた結果、正常の

妊娠期間を経て全例分娩し、平均七匹の子兎を得ることができた。このことから PMS 注射は、妊娠に何ら影響なく発情誘起に利用できることを知った。今回の実験は例数が少ないが、推奨できる方法と考えられたので、この研究の内容は畜産の研究誌に投稿してあり、いずれ印刷になる予定である。

家兎の精子上走に及ぼす過排卵処理の影響

日本畜産学会関東支部大会 十月十六日、千葉

これは、過排卵処理家兎の妊娠に関連した研究の一つで、過排卵処理家兎の生殖器道内を受精に必要な精子が正常に上走しているかどうかを知るために行なわれた。対照区および過排卵処理区の家兎を交尾後一〜五時間まで一時間おきに屠殺し、両区の精子が卵管上部に到達する時間を比較したところ、対照区では交尾後三時間で卵管膨大部に達するのに対し、過排卵処理区では二時間で膨大部に達するものがみられた。このことから過排卵処理は精子の上走を早やめることがうかがわれたが、この程度の時間差では受精に支障をきたすほどでないと思われる。この発表の内容は畜産の研究に印刷される予定なので、くわしくはそれを読まれたい。

過排卵処理家兎の妊娠に関する研究、二報、処理後の妊娠と分娩。同三報、過排卵処理家兎卵巣における黄体の酵素組織化学的観察

家畜繁殖研究会秋季研究会 十月二十七日、京都

この二題は、昨年の繁殖研究会で一報「処理後の卵子の動態について」と題して発表したものに続くものである。前にものべたように、過排卵処理を受けた動物は妊娠がうまくいっておらず、その原因説明が重要な課題になっている。このようなことから筆者は、過排卵卵子の正常性について調べたところ、過排卵家兎の卵子は、子宮に到達するまでの過程にはほとんど問題がないことを知ったので、二報において処理後の妊娠について検討した。日量四十単位の PMS を五日間皮下注射し、ついで交配し HCG を静脈注射した家兎は、妊娠率、着床数および分娩率は極端に低いものであった。そこでこれを改善するために、過排卵処理家兎の交配後に日量二十〜四十単位のプロラクチンを五日間または一日おきに五回投与したところ、妊娠率、着床数、分娩率とも増加させることに成功した。このことから、過排卵処理家兎の妊娠がうまくいかない原因の一つに内分泌の異常が想像された。

三報は、過排卵処理卵巣の機能が正常にいとなまれているかを酵素組織化学的に検討したものである。この研究では、黄体のステロイド合成に必要な脱水素酵素およびその他の一般酵素、あるいはエステラーゼ、ホスファターゼを組織化学的に検出し、これらの酵素の活性を正常妊娠、過排卵処理妊娠および過排卵処理不妊の黄体のあいだで比較した。その結果、過排卵処理家兎でも妊娠したものの黄体は正常家兎の場合と諸酵素活性に差がみられなかった。一方、過排卵不妊の黄体では 3 α 、3 β 、11 β 、16 β 、17 β ステロイド脱水素酵素ならびにコハク酸、リンゴ酸および α グリセロリン酸脱水素酵素活性がほんのわずかながら妊娠黄体より弱いことが知られた。しかし、これらの差は微妙なものであり、これだけで卵巣機能は論じられないが、ステロイド脱水素酵素の知見からして、過排卵処理不妊の黄体では、黄体ホルモン産生が弱いと想像された。

以上が昭和四十六年に学会発表したものの内容である。これらの研究は日頃、研究室の学生諸君の援助と論議によって肉付けされたものであることを附記して稿を終わる。

45年卒業論文受賞作

学長賞

ハムスターの過排卵誘起に及ぼす

Estradiol注射の影響

御 幡 寿

Hafez (一九六三)らは、成牛でEstradiol併用が排卵数を多くするのに有効であると報告して以来、幼若ラット、成山羊、成家兎などでも有効な事を見ている。この方法は内分泌学的にも実際の応用面でも興味深いので著者は、ハムスターの過排卵にこれの応用が可能か、否かを検討した。

(一) PMS注射後二十四時間に、0、0.5、1.0、1.5及び2.0mg estradiol注射し、投与量による影響をみた。交尾率はゴールデンハムスターでは、1.0、2.0mgが80、100%と高く、アルビノでは、20、60と極端に低かった。排卵率は、両ハムスターとも80、100%と顕著な差はなかった。排卵数は両ハムスターでは反応に若干の差が見られ

たがGTH処置のものに比らべると前者で1.5mg (367個)、後者で1.0mg (366個)が有効投与量と推定された。卵巣重量は、両ハムスターとも50、67mgと顕著な差はみられず子宮重量は、estradiol量により390、512mgまでとまちまちであって、特定な関係は見られなかった。

(二) 前者のハムスターを対象に排卵数の最も高かった1.5mg estradiolをPMS注射後、12、24、36時間に投与し注射間隔による影響をみた。交尾率は、時間の遅くなるのに従って100、60と低下した。排卵率は80、100と時間による顕著な差はなかった。排卵数は時間の遅くなるのに従い増加し36時間の44.6個が最も多かった。卵巣、子宮重量は注射間隔による影響は見られなかった。

(三) 排卵数の左右分布は、前者で左卵子の割合48%、後者で52%でありこの片寄り統計的に有意でなく排卵数は全体として半々に保たれている事が知られた。

(四) 幼若なゴールデンの排卵反応は交尾率60%、排卵率60%、排卵数133個であって同条件処置の成ハムスターの成績より劣っていた。

学科長賞

卵黄着色に及ぼすカロチノイドベ ーラスト(蚕糞処理物)の適正添 加量に関する研究

門 司 恭 典

家畜の飼料中にカロチノイドを添加する試みは、育雛産卵率、卵黄色のいずれに於いても、それぞれ良い影響を与える事が報告されている。著者は、蚕糞からクロロフィルを抽出した残存物中に可成りのカロチノイドが含まれているので、これをペースト状にしたものを、カロチノイド欠乏の基礎飼料中に加え、卵黄着色に及ぼすその適正添加量を算出するために、左記の要領で当実験を行なった。

(一) 実験は、七月六日、九月八日迄とし、七月一日より五日迄の五日間を予備期間とした。

二、対照区はカロチノイド欠乏の基礎飼料のみを給与し、試験I区は、この基礎飼料にカロチノイドペースト0.0、0.2%添加し、試験II区は0.0、0.5%を、試験III区は0.1%の添加を行なった。

三、供飼鶏はすべて単飼育ケージに収容し、飼料は一日一羽当り100gずつ給与した。

(二) 調査項目としては、

- (1) 排卵時における、各区の卵黄色の変化を、カラーフィルム、色調表を用いて比較検討。
- (2) 各区の産卵率の変動
- (3) 各区の卵重の変化
- (4) 各区の体重の変動
- (5) 供試鶏の健康状態の比較検討
- (6) 実験終了時における解剖所見

その結果

一、カロチノイドペーストをカロチノイド欠の基礎飼料中に、それぞれ0.0、0.2%、0.0、0.5%、0.1%の水準で添加して、その卵黄の着色効果、産卵率、体重、並びに産器への影響などを、探究したが、その結果、当該投与水準においては、卵黄への着色効果は、添加水準が高くなるにつれて、大きくなっていった。

二、産卵率や体重の推移から推察し、その適正添加水準は、0.0、0.5%内外と推察した。

三、添加に伴う被害は、肉眼的には、認められなかった。右記の結果を総合し、蚕糞より抽出した、カロチノイドを、卵黄の着色剤として、利用することはきわめて有効であり、その適正添加水準は、0.0、0.5%内外と推察した。

以上

アヒルの属間雑種に関する研究

大島 繁 夫

アヒル (Anas Domesticus) とバリケーン (Cairna moschata) との自然交配により作出された、属間雑種の発生成績、血清蛋白質及び生殖器について追求する為実験を行ひ、以上の如き結果を得た。

一、雑種卵の孵卵成績について

(一)アヒル(雌)メバリケーン(雄)である逆交配及び、バリケーン(雌)メアヒル(雄)である正交配の、いずれの組合せの交配に於ても、雑種個体を容易に作出することができた。

(二)雑種個代は、いずれの交配においても雌が作出された。

(三)正交配における受精率並びに孵化率は、逆交配におけるそれより大であった。

二、雑種個体の生殖器について

(一)正交配及び逆交配によって作出された雑種には、雌雄共に不完全ながら生殖器が認められた。しかし、

(Amylase isojyme) 活性帯が認められた。

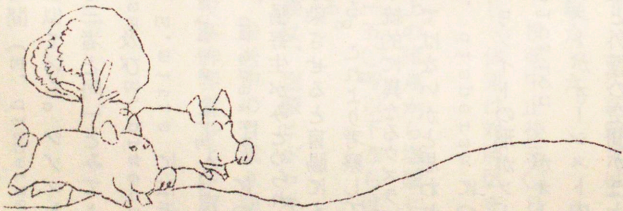
(一)雑種個体の全ては、A₁ A₂ B₁ B₂ C₁ C₂ D₁ の七本の活性帯をもち、両親の活性帯の内D₂以外の活性帯は、雑種個体に遺伝してゐた。

(二)バリケーンの血清 (Transferrin) は Tf1 Tf2 Tf3 及び Tf4 の Bond を有し、又、アヒルのそれには、Tf3 Tf4 Tf5 Tf6 及び Tf7 の五本の Bond を有してゐた。

しかも、アヒルの血清 (Transferrin) には、Tf3 及び Tf4 の Bond の濃淡の差異により、二つの型の存在が認められた。

(四)雑種個体の血清 (Transferrin) には、両親のもつ Bond が全て遺伝されており、Tf1 から Tf7 までの七本の Bond が認められた。

(五)雑種個体の血清 (Amylase isojyme) 及び血清 (Transferrin) には、両親には存在しない新らしい Bond の存在は認められなかった。



雑種の精巣には、Sperm の形成は認められなかった。

(二)逆交配により作出された、雑種の雄に雌性ホルモンを投与した結果、その精巣は萎縮した。又、正交配によって得られた雑種雌個体に、雌性ホルモンを投与した結果、卵巣の発育の可能性が示唆された。

三、血清 (Vitelin) について

(一)正交配及び逆交配による雑種個体は、いずれも、雌性ホルモンを投与することにより、血清 (Vitelin) を充分に産出することが認められた。

(二)アヒル及びバリケーン血清 (Vitelin) 中には、それぞれの特異性抗原と両者共通性抗原が在ることが明らかにされた。

(三)雑種個体の血清 (Vitelin) 中には、アヒル及びバリケーンの特異性抗原と共通性抗原が遺伝しており、両親にならぬ新しい抗原は認められなかった。

(四)血清 (Amylase isojyme) と血清 (Transferrin) について

(一)アヒルの (Amylase isojyme) 活性帯は、A₁ A₂ C₁ C₂ D₁ D₂ の六本の活性帯が認められ、その易動度により、二つの型に分けられた。又バリケーンの血清中には、A₁ A₂ B₁ B₂ の四本

三浦賞

日本ウズラのコクシジウムに関する研究

金箱 早苗

実験株（日配株）について、行なった試験につき考察する。

特徴として、純粹分離されたオーストの大きさは平均 $220 \times 173 \mu$ 形は卵円形であった。寄生は、腸管全面にわたってみられた。部検としては、腸管の出血、肥厚はみられなかった。

腸内容物は盲腸に於て粘液状であった。斃死度は、マインスであり、病害度については、虫体の寄生が、上皮細胞に限られてゐる為弱かった。

胞子形成最少時間は二十一時間で早く *Prepatent period* は八十〜九十一時間、ほぼ三〜四日にかけてであった。シizontの大きさは大きいもの二十個について調べ、その最大のものあげた。シizontの寄生部位は上皮細胞でシizont、ガメトサイトの発育環も上皮細胞に、限局し粘膜固有層や粘膜下織には全く寄生が認められなかった。

実験株を *quail* に寄生するコクシジウムである *E. dispersa* 及び鶏コクシジウムである *E. mitis* と *E. pri-*

look とで比較してみると、オーストの大きさは *E. mitis* では小さいが、他の二者は実験株に近い。明白前の時間 (*E. dispersa* には欠ける) 胞子形成最少時間は似てゐる。シizont及びガメトサイトの組織内寄生部位も三者と同一とみてよ。シizontの大きさは *E. dispersa* 及び *E. praecox* の報告がなすので述べられな

すが *E. mitis* には近。寄生部位についてみると、*E. mitis* と *E. praecox* とは多少の差がある。
E. dispersa については、*quail* 寄生の場合には盲腸寄生がみとめられないが、キジにこの *E. dispersa* を感染させると盲腸にも寄生がみられたとの報告がなされている。これより考察してみると、日本ウズラと *quail* とは系統的に異なるウズラであることから、差異も生じてく

るのではないかと思われる。
E. dispersa についての報告を調べてみると、まずメゾイトの形がソーセージ状であること *Polar inclusion* がオースト内に存在しないことスボロシストがオースト内一杯になること、オーストの内壁と外壁の空間がほとんどないことなど、すべて日配株の特色と一致している。ここに於て *Prepatent period* シizontの大きさなど、まだ報告されていない所の特徴があるが、これらが判明すればより明確なことが言えると思う。

伊藤賞

雌ウズラに及ぼす精神安定剤の影響

山本 壮一郎

雌ウズラに精神安定剤、塩酸ヒドロキシジンを一次試験においては、一日体重 Kg 当り、 50 、 100 、 150 、 200 、 250 、 300 、 350 、 400 、 450 、 500 mg/Kg 、二次試験においては、体重 Kg 当り 100 、 200 、 300 、 400 、 500 、 750 、 1000 、 1500 、 2000 、 3000 mg/Kg をそれぞれ三〇日間連続経口投与してその影響を観察した。三次試験では、投薬中止後の様子を見た。

- 一、 3000 mg/Kg 以上を投与した区においては、異常行動が観察された。
- 二、体重は一次試験においては、対照区が 2000 mg/Kg 以上の区より有意に重かった。二次試験においては、有意差は無かったが、投薬区は一般に対照区より変動が激しかった。
- 三、産卵率は一般に投薬区は低かった。
- 四、解剖した結果、肝臓・腎臓・心臓・脾臓・膀胱・

脳の重量には 明確な影響は無かったが、投薬区に組織のもろい区が多数認められた。

五、卵巣重量には、高い投薬区では明らかな影響があり、一次試験では 2000 mg/Kg 以上の区では有意に軽かった。

六、投薬中止後三〇日間で、ほとんどのウズラが回復し、体重は対照区を上回った。

以上の諸点から塩酸ヒドロキシジンは連続投与した場合、 1500 mg 以下ならば無害であるが有効ではないと思われる。

今後は、塩酸ヒドロキシジンの酸味解消、断続投与、及び、輸送中の目減り防止など、一時的ストレス解消の為の投薬許容量および有効性、などの研究が必要である。



家畜の白血球に関する研究
ブタ白血球の血液型抗原性
及び白血球抗体について

大島 博

豚白血球の免疫学的研究を行い、つぎのことが明らかになった。

- (1) 正常豚血清中および妊娠豚の血清中には微弱な同種白血球抗体が一三・六%、後者に二〇%認められた。
- (2) 豚白血球を家兎に注射することにより、豚白血球に対し凝集素価六四〇〜二八倍、沈降素価一六〇〜三二倍、補体結合素価一六〇〜三二倍の免疫抗体を産出することができる。
- (3) 豚白血球抗体は液性抗原(血清 Hemoglobin)に対する共通性のある抗体は認められない。しかし細胞性抗原(赤血球)に対しては共通的部分抗体を有する。
- (4) 豚白血球の抗原活性は、4°C冷蔵庫において保存した場合一二〇時間経過すればその抗原性を失う。
- (5) 白血球を Homogenize した上清液を免疫電気泳動

的に解析したところ、三蛋白分画よりなることが明らかである。

- (6) 豚の白血球抗体は交差吸収試験により五種類 (anti-A, anti-B, anti-C, anti-D) の抗体に精製することが可能である。
- (7) 五種類の抗体 (anti-A, anti-B, anti-C, anti-D, anti-E) を用いてヨークシャー種五〇頭について白血球を分類したところ、A因子を有するもの三二% (一六頭)、B因子を有するもの二六% (一三頭)、C因子を有するもの八四% (四二頭)、O因子を有するもの七六% (三八%)、E因子三有するもの四二% (二一頭)であった。またこれら五種の因子の組合せによる白血球型の出現頻度はCD型二八% (一四頭)、CDE型一八% (九頭) ABCD型一四% (七頭)、C型六% (三頭) ABCD型四% (二頭)、ABC型四% (二頭) AB型、ABD型、ACE型、ACDE型、CEE型、DE型、ACD型、BCDE型、D型、各二% (一頭)であった。

寄稿

大学における自由

一年 佐藤 藤

農大に入ってもう八カ月余り過ぎようとしている。四月、期待し希望と不安とが入り混じった複雑な気持ちで入学した時は、あれをやってみようと、これをやってみようか、といろいろ考えていた。苦しい味気ない受験地獄?を過してきた。そしてそれによって圧迫されて爆発しようとしていた欲求が発散できると期待していた。しかし現実、今考えて見ると、入学してから今まで何を考え、何をやって、何を達成することができたか、いや何も考えず、何もやらず、何も得られなかった。そうではなく何も考えようともせず、何もやろうともせず、何も得ようともしなかったのである。積極的に何かを求めようとする努力をしなかったのである。ある意味においては、自分の好きなように自由に過ごせたらいいのではな

いかと言う考えが成り立つかもしれない。しかし、これが本当の「自由」の大学生活であるだろうか。何も考えず、何もせず、その結果何も得ようとしなくて自分勝手な生活をするのが「自由」であろうか。うまく適度に計算して講義をさぼって、バチンコへ行ったり、マジシャンをしたり、下宿へ帰って寝たり、女の子と遊んだりするのが「自由」なことであろうか。もちろん講義自体にも決して興味のある、しかも意欲の出る講義がすべてであるとは言い切れない。けれども、確かに大学というところは、「自由」であるかもしれない。しかし本質的には、「自由」でないと思う。前にも書いたが、講義をさぼって自分の好きなことをやるのが自由であるかは疑問である。講義をさぼっても高校のように誰も文句は言わないし、出席は代弁したり、代筆してもらって、試験の前にノートを借りて一夜付けで勉強すれば単位はもらえる、だから自分の好きなことをするのが「自由」であるかとは言えないと思う。一体、大学での「自由」とはどのようなことだろうか。大学というのはやはり勉強するところ、特に高校までのような知識だけでなく、もちろん今までの知識を基礎にしてより広い視野をもった一般教養に富んだ人間も作り、より高度な専門的な知識をもった技術者または、指導者を作ることだと思ふ。だから自

分のしたい勉強ができるのが「自由」な大学生だと思ふ。それには主体性を持たなければならぬ、自分で考え、自分で実際に行動してみても、その行動に責任を持つことが必要であると思ふ。クラブやまたサークル、自主ゼミ、学生運動、研究室などに没頭することも悪いと思わない。しかし何をやるにしても「目的」を持って、かつ主体性を持ってこそ、始めて意義のあるまた「自由」な大学生生活を送り、我々農大での四年間が充実されたものになるよう努力してみようではないでしょうか。

畜友会に思う

一年 卑怯 無責任

畜友会があるということは知っている。

しかし、それが、どんな事をやっているかは知らない。役員は、それを活発にしたいという。少なくとも、みんなの会にしたいという。その方法は、リクレーション活動によってだという。確かにそれは、種々の会において、会員相互の親睦を計るために用いられている。だから、

それはそれなりの効果はあろう。また、そのような、リクレーションを求めている人も、多数いることと思う。だが、役員は、それだけを行なって、畜友会なるもの存在を位置づけようとは、恐らく思っていないだろう。では、その他に、一体何をやるうとしているのか。

僕達が入学した当時、畜友会の説明が行なわれた。役員は熱心だったが、僕にはさっぱりわからなかった。また、畜産学科を選んだのはいいが、正直言って、それも具体的に、どういう事をやるのか、わからなかった。オリエンテーションも、あまり正確につかめる場ではない。畜友会としては、こういう時、一本の綱をたらしめてやるのも必要ではないのか。

「一本の綱をたらず」、これは、入学当時でなければならぬ。時が経ってからは、もう遅い。その一本の綱は、コンバであってもいい、リクレーションであっても、懇談であってもかまわない。とにかく、一年生が、大学について、又、畜友会について、その他諸々の疑問点を、先輩から教えてもらえる場ではなくてはならぬ、と思ふ。又、現在においては、こうも思う。

畜友会の存在理由が、畜産学科生の成長、発達にあるとするならば、畜友会内部に、そういう性質のものがなければならぬ。だが、現実はどうか。僕は、そういうも

のがあると聞いた事がない。もちろん、それは、物質的なものでなくてよい。いや、むしろ、精神的なものでなければならぬと思ふ。なぜなら、人間の成長、発達にとって、精神とは、原動力なのだから。

役員は、会員相互の「和」を計りたいという。彼等のいう「和」とは何だろう。断片的なリクレーション活動で得られる「和」は、はたして、どんなものになるだろう。苟も頭に、「畜」の字を冠したのならば、「畜」に關係あることで、「和」を築いたらどうなのか。すぐにも崩れる安易な「和」なら、必要ない。より強い「和」を築くには、絶え間ない切磋琢磨が必要だと思ふ。では、そうするにはどうするか。それには、畜友会は、畜友会らしく、畜産学科生を、成長発達させる方向で、行動すべきだと思ふ。(とはいえ、それは、支配するのではなくして、単に、「場」、もしくは、「助言」を与え、会員の行動を助力する位に、留めるべきだが。)

つまり、現在、各研究室が配置されている。僕達も、三年になったならば、どこかに入室しなければいけない。だが、三年には、まだ間がある。それに、研究室に入れば、研究対象は限られて来る。そうかと言って、他の分野を一人でやるうとしても、やはり、一人の力・知識というものは知れている。それならば、クラス内で、有志

を募ってやれば、よかるうともいえる。毎日、顔を合わせるクラス員と雖も、誰が何に關心を持っているのかほとんどわからない。だから、畜友会内に、畜産に關係のある広義には、農業全体に關わるような、いくつかのサークルを結成し、それを通して、会員相互の「和」を、求めた方がよいと思ふ。合わせて、より豊富な機関誌の発行に努力すれば、そういうものから得られる「和」こそ、畜友会の目的とするものと、合致するだろうと僕は思ふ。

畜友会のあり方

一年 竹鼻 修

「畜友会って何んだ」、「俺達も入ってるの」、「役員だけでやってくれ」、という声が聞えたのはついこの前のような思いである。早いものでもう年も終りの師走となった。私はこの畜友会の一員として畜友会員に呼びかける者である。

今日まで我ら畜友会会員は自からその会員として認

識し、実践したことがあろうか。否、我らが代表である役員の言葉を真剣に受けとめたことがあつたらうか。それははなはだ疑問である。

少数の人達とは、反論する者もいるかもしれないが、それなら私は何のための畜友会か、誰のための畜友会かと言いたい。

一部の役員が授業のあい間の数分で、片言の演説を行ない、ピラを配って帰る。一般会員はなにくわぬ顔で雑談し横目で見ている。そして何もなかったように授業が始まる。そこにはコミュニケーションの一つもなく、まして意志の疎通どころではない。ただあるのは白々とした空気であり互いの不信任感である。役員は一般会員の不協力、不反応に嘆き、自分たちはやることはやっているとだという自己満足に陥入り、一般会員はさらに不反応に徹する。

このように畜友会は全ての者が望まない方向へと突進し、気づいた時は我らの手にとどかなくなってしまうてゐる。

私はこの場でこの現実を凝視する者である。なぜならばこの農大、畜産を離れて我々には農業畜産の諸問題を語り合う友を見い出すことがありえないと思うからである。現在一年生の中において微少ではあるが新しい躍動

が芽ばえている。それを表面化したのがあの運動会での爆発であり見事な成績だと思ふ。私はこのような芽を広げてゆきたい。そのためにも、一步一步の前進を望み、地道ではあるが一对一の誠意ある対話を切望するものである。又それは単に農業畜産の分野のみならず、広く我らの全般の意見の交換でもある。このような実践活動が、一人の友を作り、しいては一つの畜友会を作ると信じじてやまない。いかにすばらしい畜友会の方針があるとしてもそれは、それ自体何んら価値を持ちえない。それを実践する人、我らが行動して初めて価値を発揮しうるものである。

私は一日一人の学友との対話が真の役員の姿であり、又我らの姿であると思ふ。畜友会というものを我らのものとすならば。

最後に、このような実践があるなら畜友会と収穫祭の関連の矛盾もおのずと是正されるものと思ふ。ただ私はこの畜友会という機関が自己、あるいは数名の欲望、思想達成の手段となり用いられることを最も恐れる者である。

ならない。

自己を卑下しない厳しく自己を鍛える青春であつてほしいと思ふ。そういうた面において恋愛も必要だと思ふ。人間生きるためには唯ひとり生きていけるものではない。まして異性の影響は多分に含まれていると思ふ。つまり青春とは友情をはぐくみ精神の鍛練の時期ではなからうか。

青春とは何か

二年 M . S

人間は一生の間に、幾たびも生れ変わらねばならぬ動物である。母の胎から生れた日を、第一の誕生日とするならば、青春は第二の誕生日と言つても過言ではない。そして子供が段々と大きくなり、青春期に達すると、「愛とは何か」、「死とは何か」、「未来とは何か」、等々、様々の問いが浮んでくる。

かの有名な島崎藤村の詩に「吾胸の底のここには、言いがたき秘密住めり、身をあげて活ける、君なら誰かしらまし」、と言つ一節がある。すなわち人生に關する様々の問が、すでに秘めごとではないだらうか？又青春とは様々の可能性を含む混沌の命である。つまり何になるかわからない、わからないからこそ夢に向つてがむしやらに前進する。これが青春のもつ特権だと思ふ。今日激動する日本において若ものは甘やかされて成長して来た。その反動が今日、激しく波打つて若者をかりたてている。つまりここで言いたいののは、青春とは甘やかされるべきものではない。又自分自身を甘やかしては

夏の思い出

二年 岡田裕一

去る八月一日より十日間、所は静岡の朝霧高原に於、アイスカウトの祭典、「世界ジャンボリー」が開催された。

世界八十数ヶ国、二万人のスカウトが参加して行なわれた若者の集いであつた。

果てしなく広がる広野、富士の裾野は、色あざやかなテント、建物、旗に飾られた別世界若者の国と化した。

テントの群落は限りなく続き、各国の国旗がさわやかに

な高原の風になびいていた。

この大会では二万のスカウトが数個の区域に大きく分けられ、それぞれの区域には「平安」「江戸」等の日本の時代の名が付けられた。一区域には四〇〜五〇の隊があり、これらの隊は国別に作られており、一隊が約三〇〜五〇名程度である。我隊は江戸三〇隊で、回りに、東京（品川）、ハワイ、フィンランド、アメリカ等があった。これを見てもわかるように、とにかく日本人より外国人の方が多いのである。金髪、青い目、黒い顔、そして訳の分からない言葉等々。しかしここにあつては、人種、国別など全く問題にせず「スカウトは皆兄弟である」の合言葉の元に、共に歌い、語り、そして共に生活したのである。何んとすばらしいことか。タイヤベトナム等のアジア諸国のスカウト達は、外見は我々とあまり変わらないのでよく失敗をした。てっきり日本人だと思つて安心して話しかけてみると、意味の分からない言葉が返つて来たりした。

富士を望みながらのここでの生活は、朝六時の起床に始まり、朝の集い、行事参加、交歓会、夜の集いが主なので、行事は毎日びっしり組まれており、開会式、パレード、キャンプファイヤー等を除いてあとは自由参加で、水泳、柔道、アーチェリー、卓球等各種スポーツか

楽と歌に合せて踊るのであるが、そのうまいこと、女っ気のないキャンプ生活のためか、皆、身を乗り出して見ていた。今でもその様子を思い出すと次き出すのである。

また交歓と同時に物々交換が盛んで、皆、各国の珍しい品物を、カバンいっぱいを持ち歩るき、欲しいものがあると、手に入れるまでしつこくねばるのである。我々はハンや扇子、下駄、着物等、日本的な品物を十分に用意して道端にこれを並べて交換に応じた。しかしどれも人気があり、アツというまになくなってしまった。一般に外人は大きい、十五才というその少年は特に大きく、農大の相撲部にも、まさるとも劣らない巨体で、我々がサイトの前に来て「カモノ、カモノ」とさげぶのである。何を言っているのかわからず困っていると、交換用に行つた着物を持ち上げ「カモノ」と繰り返した。そう、この少年は着物をカモノと言つたのである。そして自分の服と交換してくれというのであるが、何分体が大きいので、とても我々には合ひそうにない。でも「カモノ」「カモノ」と、さげぶその大きな少年？に何か親しみを感じ、交換に応じることにした。

八日の夜には、フィンランドのスカウトを数人招待して、話し合つたり歌つたり楽しく過ごした。日本酒はと

ら、ハイキング、登山その他さまざままで不自由はしなかつた。

そして三日からの大雨は、キャンプ場の各所で濁流となり、テントの中に流れ込み、道をふさいだ。このため非常時態が宣言され、ほとんどのスカウトが、麓の寺や学校に避難した。しかし、このとんだハブニングは、被害は大きかつたかもしれないが、スカウトにとっては良い経験となり、色々な意味でプラスになつたと思う。

ここで面白いことは、雨のあまり降らない平穏な気候の国のスカウト達は「こんなすごい嵐は始めてだ我國の一年の降水量が、一晩で降つた」と目を円くして驚きの声を上げ、一方、フィンランドのスカウトなどは「みんなどうして避難などして騒ぎ立てるのかわからない。我々はあの雨の中でもテントで食事をし、シャワーを浴びていた。そしてみんなが帰つて来た時「ヤー諸君、やつと我家に帰つて来たかネ」と、言つてやつた」と、いとも簡単に笑つて語るのであつた。まさに世界は広してある。

キャンプファイヤーでは各国の催しがあり、とても愉快であつた。中でも特にハワイのスカウトによる、フラダンスが人気を集めていたようだ。テレビや写真で見るとある格好をしたスカウトが、しなしなとお尻をふり、音

でも人気があり、そのスカウトにも、プレゼントだと云つてやると、「オーノサンキュー」とか云つて、まるで水を飲むように、アツという間にコップ一杯の酒を飲みほしてしまつた。外国の酒は強いから日本酒など水同様ののだらう。またフィンランドでも日本商品の進出がめざましく、いたるところでそれが見られるそうである。とりわけ、車、カメラ等が多く、そのスカウトもクラウンを持つてゐるとのことだつた。日本の車は、格好よくて性能もよく、とてもすばらしいそうだ。全体に、こういった日本商品に対する興味が強く、車で云えば「トヨタ」「日産」「マツダ」「スズキ」「カワサキ」等主なメーカーの名前は驚くほど知つていた。しかし日本あるいは日本人に対する疑問や批判のあることも忘れてはならない。こうして数時間を楽しく過ごした後、今度はお礼だと云つて我々をサウナ風呂に招待してくれた。入る前に一人のスカウトが丁寧に使い方を説明してくれたのであるが、言葉がよくわからず、不覚にもこわしてしまつたのである。その場は何んとか、あやまって許してもらつたものの、後で何んとか言つていたが、我々には分からず、マアノ変な意味ではなく、言葉の分からないのもいいものである。

いくら書いてもきりがないのでこのくらいにするが、

わずか十日間ではあったが、日常では経験することが出来ないような貴重な体験の数々は、この夏の楽しい思い出であり、一生忘れることは出来ないであろう。

墮落した生活

二年 退 屈 男

狭い部屋でただ一人誰にも気がねなく生きることの楽しさ、気楽さ、学校から遠く離れた田舎にある三畳のうす暗い部屋が俺の城、右をむいても左を見ても、ひびが割れた壁と無雑作にちらかした本やノート類があるだけ聞こえるものは、時計の冷たい響きだけ、今夜も空白の時間が冷たい音をたてて流れるのを感じながら一人コーヒーをすすりタバコをゆらしている。こうしている時が俺の最も心安まる時。何も考えず遠いところをボンヤリと眺めているときに俺にとって最も正常な人間に近い時ではなからうか。こんな俺でも時々ふと淋しくなることがあるのを隠せない。そんな時は俺はウェスタンを聞いてみる。広い荒野を一人旅する夢を見ながら、そうなんだ

俺は孤独が好きなんだ。本当のことをいうとみんなとはしゃいでいるときも心の一部は醒めているんだ。酒を飲んでみるけどだめなんだ。俺の心はいつもとどこか遠いところを放しているみたいなんだ。地平を染めて沈んでいく夕陽を追いかけているように狂気じみているとは思うにだけどうする以外にはないような気がして、俺は昇る朝日より沈む夕陽のほうが好きなんだ。俺はよく思う。俺にとって必要なものは何だろうと、考えがいろいろとめぐり歩くうちにいつも同じところで止まってしまふのだ。タバコ・コーヒー……… コーヒー・タバコそしてギターなんだと、でも時々淋びしさにやりきれなくなるのは何故？ そんなときまってやさしかったあの娘のことを思い出す、もう遠い人となってしまった俺にはどうすることもできないとわかっていても、時々おそつてくる狂おしいほどの嫌悪感は何故一体俺は何だろう。俺なんか生きていく資格があるのだろうか、不思議だ。自分が何故生きていなければならぬかわからない。かといって死ぬ気はまったくない。俺には勇気がないんだ、他人が恐ろしくて他人と交わることもできない、死ぬこともできない。でも俺でも生きていた方が何かよいか気がして、とにかく生きていく。じつと孤独をかみしめ毎日を細々と細々と、生命の炎を燃え上らせることなく

細々と細々と、他人は俺にいう。「もう少し現実を意識して自分を考えろ」と。でも俺には現実などどうでも良いと思える。自分の好きなままに生きてみたい。ただ気のむくままに。たった一度の人生をコーヒーとタバコに生きがいを見出ししている俺なのさ。どうかそっとしてくれよ。何故なんて聞かずに確かなことはたぶん明日からもこうして生きていくんだろうと。これだけは俺にもわかるのさ。

畜産近代的に對する 農協の在方の一考察

三年 力 丸 啓 一

現在の社会情勢は、日々一刻としてめまぐるしい変化をしており、その中にある我が国の畜産も、当然その社会の現状に適したような変化をしなければならぬが、現在の畜産の在方を客観的に見方によつては、かなりの変化をしているように見えるが、それ自体は、他の産業から比較して、ただ単に他産業のめまぐるしい変化に響きして、ともに大きな変化をしているような錯覚に陥り

がちであるが、その本質は、他産業についていけない状態にあるのではないだろうか。このような、人間生活に對して、必要欠くべからざる物でありながら、非近代的な産業に對して追打をかけるように、大資を有し、大手商社の畜産への進出ということは、当然必然的なものである。これらこれらの商社によつての、このインテグレーションとよばれる企業集団で組織化されることである。この場合、中核的企業は、我が国の場合巨大商社であり、昭和三五年前後から、こうした動きが表面化しはじめた。巨大商社は、資本系列下にある、飼料メーカー、消費地、食鳥問屋加工メーカー、スーパー、種鶏場などと提携して、農家への生産手段の供給からはじまり、消費者へのプロイラーの供給をもつて終る。近年、大手スーパーの、ナショナルチェーン化が進むにつれて、巨大商社の重直的統合への姿勢は、一段と積極化しつつある。プロイラー部門において進展したこれらは、最近豚肉についても、活々化しつつある。この場合、産地の農協をエージェンツとして、養豚農家を、系列下におさめるケースもみられる。従ってプロイラーの場合と相似た方法ですすめられている農家の系列下への把握方法として、プロイラーの場合も同様であるが、最近、契約飼育方式から、委託飼育方式に切り替りつつある。この場合、農家

はまさしく「裸の労働力」のみを提供する「出来商扱いの賃金労働」の地位に転落するわけである。

このような体制下になりつつある現在の日本農業の対応策をいかにしたらよいか、ということであるが、これらのインテグレーション体制が、完全に整う以前に、対応策を考え出さなければならぬ。そして、今からでも実行しなければならぬ段階にきているのではないだろうか。その対策を具体的に述べるならば、それは、農民の手による農民のための組織である農業協同組合の再検討、及び、抜本的改革により、畜産のシステム化を計ることにあるのではないだろうか。畜産のシステム化とは、地域農業に対し、生産、流通面を通じて、一定の拘束力を持つコントロール機構が中枢となり、生産、流通面における各種機能を、共通の目的に向かって、最大の効果を上げるように巨大化し、総合化することを意味する。ここでの共通目的とは、農業の国際競争力強化と、所得パリティの実現の他に、消費者に対する安定した価格と、低流通マージンの食料の供給という、このようなシステム化の中枢となる。コントロール機構として、我国農村の実情からすれば、農協、特に単協が一番適当と考えられる。

農協を組織する目的は、言うまでもなく、生産者としての合理的な流通経路を選択し、新しい物的流通技術を導入して、できるだけ低流通マージンで安定した価格で供給することが望ましい。

流通近代化に対応する農協のあり方の展望としては、機能面において、全面的にマーケティング戦略を導入し、これを可能にするために、組織経営面についての体質改善を進めることにあるのではないだろうか。原則として、共販の主体は、あくまでも単協にあるべきで、県連以上の連合会は、単協のマーケティング戦略の補充的機能を分担する型が望ましい。この場合単協は、農協共販の最終責任を負う組織であるので、当然、大規模農協でなくてはならない。県段階については、作日専門連を組織し、このブロック専門専が、広い意味での情報機能流通追加施設に対する投資機能ならびに、単協のマーケティング機能の調整及び、コンサルタント的機能を担当することとし、単協のマーケティング戦略の展開をバックアップすることが望ましい。全国段階については、全販連も併合して、強力な共販センターを設置する。ここでは、全国レベルの情報機能流通加工施設に対する投資機能、さらには、新しい流通経路開拓のための総合的機能（集配センターの設置、産地直結方式のあっせん等を含めた）を担当することとし、これによって、単協のマーケティング

の農民の農業所得の増大と、安定化を計ることである。しかし、現実の多くの農協は、こうした姿勢ではなく、

ある場合は国の農業政策のエンジニアと化したり、又は、農業をとりまく加工流通資本の下請機関化したり、さらには、系統農協自体の組織ないし経営防衛姿勢がめだつなど、基本姿勢のゆがみがみられる。以後、農業粗収益の増大及び安定化、農業経営費の低減及び安定化の農協の基本姿勢のもとに、抜本的改革が必要ではないだろうか。これらを具体的に述べるならば、システムコントロール機構としての農協は、地域開発計画の樹立に始まり、革新技術を導入し、各種の機械に設備投資を行い、生産の諸資源、資本、各種の機械に設備投資を行い、生産の諸資源、資本、労働力の結合方法により、自主的規制を行うことにより、農業の大型化をリードしていくことが必要であり、また、流通面においては、農産物の生産すべき量と質、ならびに、それを可能とする生産形態は、あらかじめ市場調査によって明らかにされる需要の量と質に基づいてとるべき流通経路、物的流通技術などが、検討された後にはじめて、決定されるものである。従って、農業が、食糧供給を行うに当っては、まず、流通情報の分析結果に基づき、需要に合わせて生産を行い、商品化段階を経て出荷することが必要である。さらに、

ング戦略のバックアップの最もよい方法ではないか。

大学での学問とは

畜三 砂 金 甚 一

私は農大に入学して以来、はや三年の年月が過ぎさうとしているが、大学において学問をするとは一体どういうことなのであるか。一筆書かせてもらいたい。学問をする、及ち学ぶということとは一体どんなことをするのか、実に自明なことの様に思われるのが、考えてみるならば、なかなかむずかしいのに気づくのである。それは、個人個人、みんな考え方が異なるからである。我々が中学生、高校生であった時には、教科書に書いてあることを正しく理解して、それを覚えこむことが、学問とは言わないかもしれないが、それをとかく勉強と考えるきたものだ。また、両親たちは世の中に出てすぐ役に立つ知識なり技能なりを修得することが学問をすることであると考える人が結構よくいる。また一部には、文芸・美術などいろいろな技能など、世渡りにすぐ役立つたない

が、教養としての、いわゆる、物知りになるのが学問だと思つている人も中にはいるのではないか。以上のことは広くいえば、確かに一理あると思う。しかし、我々はこのように考へて満足しないし、学ぶ、学問するということは、もっと困難をとまらうのである。我々が大学生として勉強する場合、学問するということが前述したような考へ方で学んではいけなから、では一体、大学での学問というのは、どうでなければならぬのだろうか。それは自分で考へる力を養うことである。大学で学問をする、勉強するということは、中学や高校でのいわゆる勉強とは、その意味が異なるし、また、ちがつて当然である。大学では、専門がきまつていること、他に勉強する態度という、根本的に重要なことがある。その態度とは中学・高校の態度を百八十度転換したものである。それは大学では高校までのように、でき上つた知識を身につける、或は丸暗記するだけでは不十分なのである。それよりもむしろ、講義に触発されて、それぞれに、自分で考へる力を養うことが、勉強の主眼なのである。先生もまた高校までは教科書を教えることが主であつた。教科書に書かれてある、いわば一種の押し売りにすぎない。しかし大学の先生は、どんな場合でも押し売りは許されないことである、ただ長い間研究して、その先生が到達した立場から、自分の一貫した考へ方を講義するだけなのだ、それはその先生が研究していることの一つの考へ方を筋道立てて述べるだけなのだ。つまり、自分の説とはちがつた考へ方が、

ほかにたくさんありうるといふ前提の元に立つて講義されるわけだ。ではその様な講義に対して、どういふ受け取り方をしたら良いのか。すぐれた先生は、自分の講義が丸暗記されることを望んではいないはずだ。先生は、ある前提、ある立場を論理的に説明する。その講義は前提なり、立場から、一貫した論理をもつてなされる。その場合、ある問題はこういふふうにか、こ、ういふ結果になるといふ立場の一貫性というものが、一例として、講義されているだけのものである、という受け取り方をしなければならぬ。だから我々学生側は、その講義が果して一貫した論理をもつているか、或は一貫した立場に立っているか、さらに、自分にも納得できるものかといふことを、たえず考へながら聞く必要がある。だからその様な態度は、中学から高校にかけての勉強のように、これさえ学べばよいとか、先生のいわれた通り、まちがひなく暗記すればよかつたのとは根本的にちがう。講義されていることは、思考の一例が述べられているにすぎないのだから、学生である我々は、たとえ先生の説とちがつていても、自分で勉強して自力でエンジンのかかつた研究をする糸口を自分でさがすことが大学で勉強する、学問をする最も大事な事であると思ふ。自分の心の中にあるテーマをつかみ、自分は徹底的にこれを研究してみようといふ考へをもつ、その機縁をつくるのが大学の講義の最も大事な意味なのである、あるまいか。

農場だより

農場の今昔

農大農場の歴史は明治二六年八月、本学の前進育英農学科が小石川の大塚窪町にあつた当時その構内に約一・三haの圃場を実習地としたことに始まり、その後借地による実習が行われ明治三九年鍋島家から土地を借入し駒場農場の全盛時代になり種豚四頭、一八・一八mの豚舎建設の記録も見られる。

大正五年玉川村用賀に三・一haの農場を設置し設備の充実拡大が行われ、大正十五年には九・〇九haの圃場と建物十八棟（内畜産関係は牛馬舎一棟・豚舎二棟・鶏舎二棟・飼料調理舎一棟・堆肥舎一棟）が建造され学生実習の場として活用された。

又粗放的な機械耕作の実習場として昭和三年から終戦まで樺太豊原町に農大樺太農場（一九二・六七ha）を、満州にも農業拓殖科の訓練実習を目的した農場（七五〇〇ha）も設置され、一方内地では三鷹、千歳船橋、大蔵にも農場を置き、当時の学生はこれら農場に通つて畝を

握り額に汗を浮べて実習を行ったのであるが、終戦により樺太・満州の農場を失ひ戦火をうけた本学も、常磐松から現在地に移転したのを契機に農場も統合整備が行われた。昭和二年に千葉県茂原に千葉農学部が開設され畜産科が誕生して、その頃吾国では殆んど飼養されていなかったジャージーが航空隊跡の牧場で草をはみ、学生も張切つて実習したものである。

然し昭和三五年、東京近郊に総合大農場を建設することを前提として用賀農場・茂原の牧場を解消し、神奈川県厚木市に三二haの農林地を購入して東京農業大学総合農場が開設され、学生・教職員の手で建設充実が図られ現在に至っている。農大には他に二宮（ミカン）富士（畜産）の分場がある。

〔厚木農場〕

相模平野を南北に縦貫する相模川の沖積地に発達した厚木は、江戸時代より交通の要地で江戸五街道の一つ厚木街道が赤坂まで続き小江戸として繁栄、また厚木の名が示すように木材の集散地であつたが、現在は東名高速道路厚木インターチェンジの完成で内陸工業団地が造成され産業都市として伸展している。

この厚木市の高台標高五〇〜七〇米の尾根が中軸にな

っている丘陵地に農大農場が位し、中ヨークシャー・パークシャーが養豚経営の中枢をなしていた最近まで、高座豚の産地として名を馳せた平野を一眺にしている。農場の南部台地は緑ヶ丘と名付けられ、温室を中心とした造園・花寺・園芸の中心で、東郷元帥ゆかりの旧邸（黒猫荘）が移築されている。中央部は学生実習の中枢地区で本館・教室・作物・蔬菜・果樹・工芸作物・飼料作物の圃場、北部は北に大山の雄峰南に江の島を望む豊醍山を中心とした畜産センターで、一帯を常磐ヶ丘と呼んでいる。

この農場は農大全学の実習場としていろいろの角度から活用出来るように建設され、学生教職員の実習研究の場として、又地域社会にも農業技術の開発普及に貢献出来る内容の充実と施設の確保に努力しており、現在普通作物・果樹・蔬菜・花寺・造園・大塚畜・中家畜・家禽・飼料作物・農業機械の係がその任にあっている。

普通作物係は吾国で栽培している水稻の全品種と外国品種をもち、特用作用係はバナナ・パイナップル・インナプルなどの熱帯作物・薬用植物・茶などを栽培し、近く農大で使う全部のお茶を生産することを目標としている。果樹係は落葉・常緑の全果樹を、蔬菜は露地と施設園芸の野菜部門、花寺係は路地・温室の草花・切花・観

葉植物など特に菊・バラの品種が三百種以上、造園は庭園材料や椿の種類の多いことでは吾国でも屈指である。

畜産部の特徴は、他の大学は特定の家畜のみ飼養しているが、本場は広範な実習研究に対応出来るように各家畜を網羅して飼育しており、その数も多く全部が実習に供されていることである。従って生産・収入が必ずしも多いと云えないかも知れない。然し実習に卒論の実験に全家畜が使われて無形の収入が尨大に上がっていることを加算すれば、利益はばく大であろう。畜友会諸君がより農場の家畜を利用して無形の収入を倍増してくれることを期待してやまない。

彼女（家畜）らは、モウ（牛）ケッコ（鶏）トン（豚）でもないとは絶対いわないはずである。

〔富士分場〕

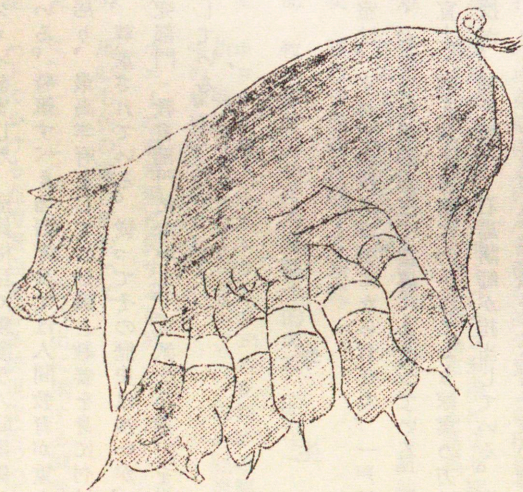
東南に麗峰富士を仰ぎ、毛無山系を背にする朝霧高原の一角、標高八三七米の地に二〇haのグリーンベルトでゆりゆりと七〇頭の牛が遊び、キング式とルーズバーン牛舎が腰をすえ、三百人が宿泊できる山荘……それが農大富士分場である。

この地は天正年間に武田信玄が甲州小判を鋳造する金を採掘した記録があり廃坑も残っているが、元禄二年の

毛無山崩れで金の貯蔵庫も埋没したという。一昨年農場の配水管工事の際土中から金鉱の引きウスニケとノミをとぐ砥石が原形のまま発見され、当時を物語る証拠となっている。この毛無山はハイキングコースもあり山頂からのアルプス連峰の眺望はすばらしいので、勉学とリクリエーションを兼ねての富士分場利用は学生時代のよき思い出となることを確信する。

富士分場は昭和十七年に農材経済科が身心鍛練のための修練道場として鋳入れを行い、終戦まで道場としての使命を果して来たが、昭和三二年朝霧山寮が完成し富士農場と改称、学生の実習・厚生施設として情緒ある茅葺の宿舎「翠山荘」と建造されて、農大関係者は勿論学外の利用者も富士分場の醍醐味を満喫できて喜ばれていた。

昭和四二年より畜産部門特に肉牛の肥育と乳用犢の育成を中心とした実習農場として運営されることになり、年次計画で毎年四haづつ畜産科学生・農場技術練習生によって草地造成が行われ、四五年間で一六・五haの牧場が完成した。この草地は前記の山崩れによる砂礫の堆積地なのでトラクターによる耕耘が不可能で人力による除石・トラクターによる作業が主体で困難を極めたが、河川敷同様に荒廃地が草地化されたことは、粗飼料資源の不足している吾国の現状から極めて意義があることと



思う。しかし生産される牧草が低廉でなければ意味がなく、特に更新時の費用軽減策が次の課題である。この問題についても学生諸君と共に研究し解決して畜産発展に寄与することが農大農場の使命であろう

研究室だより

家畜繁殖学研究室

室長

当研究室は、平林忠教授を室長とし、一戸助教、石島講師、門司副手と学生四〇名より構成されている。去る十月に学長選が行なわれ、平林忠教授が学長に就任なさった事は、当研究室にとって最も喜ばしい次第である。

研究室は便宜上、その研究分野を哺乳類の繁殖と、家禽の繁殖にわかれており、哺乳類の方は学長と石島講師が担当され、家禽の方は一戸助教と門司副手で分担している。

研究テーマは、哺乳類に関しては、人工妊娠と産子数の増加、受精卵の体外培養と保存などを中心とし、家禽では、その孵化時間、人工増殖、野鶏の繁殖などを研究の対象としている。室員は毎日、飼育管理、実験、作業等を全員が協力して、楽しく進めており、週一回実施されているゼミナールでは、室員の研究発表、先生方の研究報告、その他卒論のテーマなどにそって、文献を中心

とする勉強会などを行なっている。
この様な研究ばかりではなく、親睦旅行やコンパ、レクリエーションをまじえ、室員相互に親密な人間関係が保たれている。特筆すべき当研究員では人間教育が重んじられて居り、最高学府としての知識と教養を身に付けることが、尊重されている。従ってその歴史は浅いが、すでに研究部門・教育部門において、立派な卒業生を世に送り出している。

学 生

当研究室は、平林忠教授が学長になられた為、一戸健司助教・石島芳郎講師が主に指導にあたっている。研究室は便宜上・哺乳類と家禽にわかれており家禽の方は一戸助教が、哺乳類は、石島講師が担当している。主要研究テーマとして家畜の人工妊娠および産子数の増加の研究・授精卵の体外培養および保存・家禽のふ化に関する研究・野鶏に関する研究などであり、そのほか各家畜の繁殖状況の調査にも手を広めている。

当研究の実験動物として、ラット・ウサギ・マウス・ハムスター・家禽・野鶏などを用いている為、その飼育管理は、研究の基礎であるという考えで室員全員が責任

を持ち協力して当番を行なっている。したがって、当番を無断で休む様な学生は、置いていかれる事になる。

室員は家禽・哺乳とも週一回のゼミナールを持ち、繁殖学に関する内外の文献を中心に先生の学会報告・四年生の卒論経過報告・三年生の文献紹介など、熱心な討論が行なわれている。研究室の行事としては、この他に新室員歓迎会・送別会・旅行・野球大会等があり、研究活動とあわせて大変なごやかなムードの中で行なわれている。また年一回学生の編集による室報の発行も行なっている。

卒業生は、地方公務員・教員・種鶏場・養豚場・製菓会社・食品会社・牧場関係・研究機関・海外など広く活躍している。

当研究室の構成は次の通りである。

- 室長 平林忠教授、 助教授 一戸健司
 - 講師 石島芳郎、 副手 門司恭典
 - 室員
- | | |
|----|-----|
| 四年 | 一一名 |
| 三年 | 二五名 |

昭和四十六年度

卒業論文題目

- 秋葉 光頼 肉種鑑別に関する免疫学的研究
- 天野 正治 カメの雌雄差に関する形態学的研究
- 荒川 展行 牧場設計における育種学的考察(軽種馬)
- 白井 行雄 家鶏におけるフェザリアルブ利用により観察される性染色素質とその雌雄による差異
- 小野 博雄 豚の血液型に関する研究・免疫による抗体産生並びに同定試験
- 大田 正美 豚の背脂肪に関する研究
- 大橋 四郎 牧場設計における育種学的考察(乳牛)
- 奥村 博史 ホロホロ鳥とニワトリとのF1の受精率の解析、特にPre-incubation 卵の胚発生の状態を中心として
- 加藤 昭夫 ポニーの血液型に関する研究
- 加藤 徳美 馬の毛色の遺伝について
- 河野 侑史 Miniatura pig の作出に関する調査
- 原 顕道 ハトにおける血清蛋白質の多核現象について
- 増田 彰 土蕃の卵白、卵黄および肝臓アイリザイムについて

家畜育種学研究室

室 長

望月 正彦	孵化鶏卵中の蛋白分画ならびに遊離アミノ酸について
森 繁夫	鶏肝臓のバイオプシーとそのアイソザイムに関する研究
守部 公博	山羊血清中アミラーゼアイソザイムに関する研究
山田 耕三	家兔血清中のエステラーゼアイソザイムについての研究
山田 裕和	牛乳中における血清アルブミン含量の免疫学的定量法
横山 得治	ニホンウズラに於けるアミラーゼ及びエステラーゼアイソザイムについての研究
横浜 道成	牛同種免疫による抗体の産出順位並びに自然抗体の検索
渡辺 正平	ボニーの血液型に関する研究

言及するまでもなく、家畜の育種とは有用な動物の遺伝的形質を改良して人類の生活に貢献することであり、育種学はその基礎となる遺伝学を中心に生理学、生態学、発生学、生化学、生物統計学など総合的な研究を必要とする応用科学である。従って研究の対象は非常に広範囲に及ぶが、現在当研究室が最も主力を注いでいる分野を挙げるならば次の二つに集約されるであろう。

その一つは家畜の血清学的性質に関する研究である。すなわち人類の利用する家畜の性能（能力 *performance*）は一般に複雑な形質であるが、これら形質を発現する遺伝子を分子レベルで追及しようとするものである。具体的には生体構成の主要部分である蛋白質の特性の検出であり、家畜の血球型・血清型分類による遺伝子構成の究明である。そのためには免疫遺伝学ならびに電気泳動法等さらに研究が進められなければならない。他の一つは在来家畜に関する研究である。この研究の目的は、各家畜の系統的起源を明らかにし、その改良過

程を追究するものであり、単に育種学的見地のみならず社会文化的見地からも重要である。現在わが国における在来家畜は、外国からの導入種畜により急速に改良された結果その数は極めて減少しているが、まだ東亜に広く分布している在来家畜の形態学的・遺伝学的調査により、一連の興味ある研究成果が得られつつある。なおこれら二つの研究は全く異質のものではなく、前記の免疫学的ならびに電気泳動的手法が在来家畜の有する多くの遺伝形質の分析に用いられている。

以上は当研究室における研究部門の主要テーマであると共にまた特色でもあり、興味のある学生諸君にとっては魅力ある研究活動の場となることを確信する。

学 生

家畜育種学研究室は、鈴木正三教授を室長に、田中一栄助教、渡辺誠喜講師、天野卓助手の諸先生と研究室卒業生による、特別室員、大学院生（五名）及び専攻学生（四十一名）による、普通室員とから構成され、畜産学の進歩とともに家畜育種学の発展はめざましいものである。

研究室活動は、家畜育種学の基礎的応用学的学問の追

求を広範囲にわたり、そして特に本研究室の特色としては血清学をその方法論として採用し、学生の希望する研究の場を提供している。

海外調査活動も活発に行なわれており、三月には、田中助教、天野助手をメンバーの一員とする在来家畜調査団がタイ国へ、また五月には、天野助手がフィリピンへと活躍している。そして、今年の収穫祭に於ける『東亜在来家畜の頭骨展』はその研究報告の一端の一端である。

さらに毎週の活動として、学生の自主的な考えにより出されたテーマについてのゼミナール、そして談話会と活発な討論が為されている。

また、年一回の『室報』の発行は、特別室員との交流に於いて重要な活動の一つでもある。

家畜育種学研究室は権威ある諸先生の温かい御指導のもとに今後向一層の飛躍をめざして、学生は研究に交友に大学生活を有意義に活動して行くのです。

昭和四十六年度
卒業論文題目

- 大井 久夫 サラブレットの血統と能力に関する調査
小森谷 博 ウズラの孵化について、特に孵化初期における胚の死亡について
桜井 誠一 PMS 処理によるマウスの反復過排卵誘起
志賀 耕三 青森県下北地方におけるヘレフォード種の繁殖状況調査
島津 宏 過排卵処置ラントの着床に及ぼす各種ホルモンの影響
藤田真理子 PMS 処理ハムスターの排卵数に及ぼす Estradiol 注射間隔の影響
前田 泰治 ラット・マウス・ハムスターの精巣重量の左右差の検討
松井 悟郎 家兔の過剰妊娠に及ぼすステロイドホルモンの影響
持田 大介 ウズラの孵化について、貯卵日数の孵化率に及ぼす影響について
百瀬 誠 過排卵処理後不妊に終わった家兔の卵巣機能回復時期について
山崎 道雄 腹水による家兔卵子の体外培養
渡辺 誠二 ハムスターの過剰妊娠に有効な処理方法の検討

この様な時勢に於いて現下の畜産に、重視せねばならぬ新課題として、家畜衛生の問題がある。現在迄、この家畜衛生の分野は、その必要性は認識していたものの、これに真剣に取り組むという意欲に欠けていたことは否めない事実であった。然し現在の様な多数羽飼育に於ては、家畜衛生の必要性は、再認識され、家畜の飼養家自身もまたその重要性について認識を新にしている。そして家畜衛生の万全を期する様、鋭意努力する様になった。

畜産の主たる目的は、優良な家畜を増産し、それから生産物を確保することにあるから、その為には家畜を丈夫に育て上げ生産の向上を図らねばならない。如何に生産性の高い優良な家畜であっても、健康でなければ、その生産性を十分發揮することは出来ない。従って健康を阻害した生産の向上を阻害する因子があれば、それを除去し、常に生産原動力である家畜が健康であるよう飼育する必要がある。ここに家畜衛生の意義があるわけである。

現在の様な多数羽飼育形態に於いては、昔の様な小羽数飼育形態の時代と異なり、家畜の住む環境は自ら異なり、環境からくるストレスは意外に大きいものがあり、この環境の不良は直接家畜に対してストレス源となり家畜の健康を脅やかし、又生産性を低下するように働く。

須藤 哲篤 東北地方における日本鶏に関する研究 主として、金八、比内鶏の作出過程について

家畜衛生学研究室

室 長

現在我国の畜産は未曾有の進展を遂げているが、その進展した畜産を更に健康に伸ばす為には、今後これに関して研究すべき、また絶対すべき問題がある。国内的観点に於いて見ても、育種、繁殖及び飼養並びに畜産物製造加工に関する畜産学全般に亘って検討・研究すべき問題を抱えており又、経営面に於いても現在我国に於ける経営形態を如何に方向付けるかはまた、重要な課題である。又対外的に見ると、物質自由化に伴う我国畜産への脅威は年々増大し、これによる将来の我国が受ける打撃の大きい事が予想されるだけに、これに対処すべき畜産経営農家の不安は、特に大きなものがあるものと思考される。従って、これらの点の解決の一日も早からん事を願うものであるが、その解決は言うべくして難く、畜産に関する官民一致の協力体制が望まれる次第である。

従って家畜衛生分野では、この環境が適当か否か、環境の最適な条件下で家畜に対し、全くストレスを加えない状態に置くことが、必要であるから、現在の家畜衛生面での第一要件は、まずこの環境衛生を如何にすべきかというところがその第一要件といふべきでありましょう。然るに我国では、自然環境すなわち気象条件が、欧米諸外国の家畜に比し、家畜飼養に極めて不適な条件に在るにもかかわらず、現在迄、環境衛生の問題に対する研究は極めて貧弱である。我々はこの点に眼を向けて、まず家畜衛生分野の研究面として、環境衛生の研究を急速に推進する必要を痛感するものである。

次に、家畜の健康を保持し、生産を確保するためには、全般的な栄養素の配分と給与が必要なのは言を俟たない。ここに飼養学の重要性と意義がある訳である。従ってその目的を達成する為、現在まで、各家畜に対し、夫々飼養標準が樹立せられていたわけであるが、現在のように各種の環境的ストレス因子が家畜に加わりかつ、各種の病気に動物がかかり、又これらの動物に各種の薬剤を注射するなど、これら有形無形のストレスを家畜に与えている現状では、従来通りの飼養標準では、家畜の健康並びに生産性を保持するためには極めて不十分となつて来た事は衆人の認める処で、飼養標準の改善が望

まれる処であり、家畜衛生面でも、栄養の過不足による家畜衛生への影響は栄養障害の形をとって、健康や又その生産性を阻害するばかりでなく、栄養障害という一種の症候群としての疾病の原因をなす事も衆知の事実である。従って、家畜衛生の第二の要件として、この飼料衛生が取り挙げられねばならない。

次に第三要件として、伝染病の防除という事が、現在特に強調せられねばならない。前述の様に現在多数羽飼育或いは集団飼育形態をとっている関係上一度悪性伝染病発生の場合は、その及ぼす被害が極めて甚大となることは、昭和四十一年度に於ける鶏のニューカッスル病発生の一例を見てもうなづける事実である。そして、この病気による生体のうける障害は唯単に、健康が障害を受けるのみならず、生産の原動力である家畜そのものが斃死する憂目を見るもので、第一の環境、第二の飼育要件に於ては、その障害を改善することによって容易に健康を回復し、生産の向上を期する事ができるものであるが、第三の要件たる病気による障害は一見健康は回復したように見えても、完全に生理機能の回復までには長期間を要し、その間の生産面における損失は、規模が大きくなっただけに、それに順じて莫大となることは否めない。従って不断に病気対策につき考慮することは、畜産

経営上、家畜飼養家にとっては、誠にゆるがせに出来ない事である。

今後の家畜衛生は、以上の事実をふまえて、第三要件を考慮の上に検討を重ね、研究を推進すべきもので、これら三要件が、相共に全うせられて初めて家畜衛生の真の目的は達成せられるものであり、ひいては我国畜産の将来も期待されるものと思考する。従来一般に家畜衛生といえは、即病気の防除というように考えられていたし、また、その方向で進められてきたきらいもあったが、今後はこの様な狭い視野ではなく、以上の環境衛生、飼料衛生、はた又飼養管理面へと広い視野についての研究と検討がなされねばならないと思考する。

学 生

我が家畜衛生学研究室も、その前身である獣医学研究室より年数を数えれば二〇年の歴史があります。

その名称を変更してからは四年目を迎え、これから増々、室員一同やる気十分な気持で一ぱいです。

現在の室長でおられる川島先生も、就任四年目を迎え、講義、研究室においても活躍中です。又、近江先生、渡

辺先生も我々のよき兄貴分として、学問探究、学生生活恋愛問題等、気軽に相談にのってもらっています。

以上三人の獣医師の指導のもとに、研修生一人、院生二人、四年生一七人、三年生一八人、二年生五人、総勢四六人のメンバーで、もって構成されております。

そして、各々自己の目標をはたさんがために、研究室に泊りこみ泊りこみも辞さないという豪傑肌の室員もいて、毎夜農大の研究室のうちでは一番遅くまで電燈が輝いているという、うわさがたつのも、むりもなからぬことでありましょう。

このような徹夜の研究活動において、実験材料で観察が終ったニワトリを使つての、夜食づくりのたのしさ、インスタントラーメンのうまいことは、この上もありません。

先輩、後輩のお互いの信頼も顔をつき合わせての研究から生まれてくるものではないでしょうか。

とにかく、当研究室には研究の虫といわれるような人間がゴソゴソいます。

また今日、経済の発展に伴い、畜産界においてもより、能率的に収益を高めるように、多頭羽飼育が推奨されている折から、又、国民保健衛生上からも、家畜衛生の重要性は大変重要であると思えます。

ここにわが家畜衛生学研究室の存在がクローズアップされなければならぬことはもちろん、室員一人一人の原点に立った大局的な立場から考察を加え、自分が現在行なっている研究課題について、ふりかえってみることも必要でありましょう。

以上のようなことを念頭において、現在行なっている研究活動には、川島、近江、渡辺各先生の御指導の下に、四年生の卒業論文の研究があります。

その大まかな研究内容を列記しますと、「ビタミン類欠乏鶏のND抗体産生能について」、「各種薬剤の混合感染鶏に対する効果」、「環境汚染にせし息する土鳩の観察」、「犬フィラリア症に関する研究」、「牛、豚等の内外部の寄生虫の駆除に関する研究」等々が今年度の卒業テーマとして研究しています。

又、他に診療所業務の補助、ゼミ活動、衛生検査の基礎実験の習得、そして室員間の親睦より一層の向上をはかるための「新入室員歓迎会」、「ソフトボール大会」、「コンパ」、「一泊二日の旅行」等を行なっています。

このような多面的な研究室活動において、各自の自主性、協調性、並びに将来の研究に臨む研究態度を把握するような研究室に近づくよう、各人の努力に期待します。

昭和四十六年度
卒業論文題目

- 磯部真一郎 V・Bのニューカッスル病抗体の産生に及ぼす影響
- 井上 貴雄 日本ウズラのコクシジウムの寄生部位とその発生環の追求
- 上杉 卓二 犬 フィラリア症に関する研究 砒素剤投与後の犬体の変化について
- 内堀 道雄 ビリドキシンのニューカッスル病抗体の産生に及ぼす影響
- 大岡 訓章 V・B欠之鶏のニューカッスル病抗体産生能力について
- 神田 英保 V・B欠之鶏のニューカッスル病抗体産生能力について
- 北園 孝 シノミン+タイロシン混合製剤の呼吸器性マイコプラズマと伝染性コリーザ混合感染に対する防禦効果について
- 小池 正文 外部寄生虫の駆除に関する研究 豚シラミに対する各種駆除剤の検討
- 五味 一重 家畜の内部寄生虫症に関する研究 豚の内部寄生虫に対する駆虫剤の検討
- 田中 幸生 ミカマイシンの鶏慢性呼吸器病(C・R・D)に対する予防並びに治療効果に関する実験

- 本間 安雄 家畜の内部寄生虫病に関する研究 乳牛に於ける肝蛭病の診断について
- 松河 清三 N・Dウィルス並びにI・Bウィルスとマイコプラズマガリセプティカムとの干渉あるいは相剋効果に関する研究
- 丸塚 正真 ニューカッスル病の移行性抗体を有するヒナにおける生毒並に死毒ワクチンの効果について
- 村田 明 ニューカッスル病生ワクチン接種鶏におけるHI抗体価と感染防禦能との関係について
- 山木 百重 汚染環境に生息する土鳩の呼吸器(肺並に気管)の病理組織学的所見について
- 山崎 俊道 汚染環境に棲息する土鳩の呼吸器(肺並に気管)の細菌叢について
- 吉永 直好 ニワトリの生態に関する研究
- 池谷 佐平 家畜の内部寄生虫症に関する研究(特に豚仔の消化管内寄生に対する駆除剤の検討)
- 三輪 弘男 酪農団地の造成の事例的研究
- 垣内 伸夫 肉用牛における鼓脹症発病原因とその発育におよぼす影響について

飼養学研究室

室長

当研究室は昨年十周年を迎えた。この室の創設は平林教授によるもので、初代の室長は海塩教授であったが、昭和四〇年に逝去され、以後、杉村教授が担当して今日に至った。

研究室のスタッフと各自の主な受け持ち課題は、ほぼ次のようなものである。

- 家畜の栄養化学、栄養生理、飼料成分などの研究——杉村敬一郎
- 家畜の飼育管理方法、畜舎、飼料の物理学的性状などについての研究——伊藤澄磨
- 飼料のエネルギー問題、同じくその代謝などの研究——栗原良雄
- 概ね右のような数本の柱を主軸として研究を行なっている。

栄養関係は、タンパク質栄養に最も多くの重点が置かれていたが、近頃は、タンパク質と飼料エネルギーとの関係を重視する機運にある。管理学は、かなり広い部面

を抱含する分野であり、牧草、牧野に関する部面も含まれる。飼料の物理性状に関しては、目下は家禽の消化器管についての研究が進められている。

これらの諸研究を行なうに当って、当研究室は、次のような理念に基いて、事に当たっていることを記しておきたい。即ち、大学における研究は、高度な技術教育に資することが、目的の大半であるから、その成果の如何を問うだけでなく、研究の目的、方法、論考の各段階が、学生各自の参加のもとに行なわれ、その能動的な思索によって行なわれ、将来、高度な技術者としての素質に、役立たなければならぬ。さらに、すべての研究は生産を指向し、広く社会に貢献することを、心がけていなければならぬ。特に飼養管理の技術に関して、採算の重視から、薬物の過度の使用とか、飼料の物性の不適切など、技術的な行き過ぎを、反省すべき時期に來ていると考えられるので、これらの問題も、研究課題で考慮している。飼養学は、学問的分野としても、広い範囲にわたるので、対象とすべき部面が、ややもすると「焦点ボケ」になるので、なるべく、前記の主要課題に統一して、行なうものであるが、これらの課題以外の項目については、手薄になることを補うために、「情報委員会」を室内に設定して、直接研究段階に乗らない項目に関して、調査

するシステムができるので、教育の向上に有効であり、情報整理方式を体験することは、室員の将来に役立つであらう。

研究を行う段階においては、学生であること以外に、一つの独立した研究者としての、別の立場に立たなければならぬ。従って、能動的に思索しつつ、行動することを重要視する。実験だけを受動的に行なうと、研究の結果が教職員だけの成果となることは、これからの大学のあり方に反すると考えている。

そのために、四年間で必ず卒業させてあげよう、という気は全くない。

大学のあり方が、厳しく問われている現今、そのレゾンデートルは、世界の潮流の中から見出すべきであろう。我国の教育の普及は、よろこばしいこととはいえ、逆に大学卒業者の質的低下を来し、国際的環境での下での、重要な役割りについての自覚を、失なわせているならば、重大な危機である。世界史の大きな転換の時期にあたって、世界的視野から見て、大学卒業者に對する世界の民衆の期待は大きいのである。日本でこそ、掃いて捨てる程いるからと云って、自らを下げることは許されない。此の意味での、批判に耐える大学卒業生、となるために必要なことは、大学自体の、組織体制が重要な

ことはもちろんであるが、研究室のもつ役割りは、きわめて大きいと云わなければならない。

大学は、世界史と遊離して存在することは、出来ないことを深く自覚し、世界史の頁を、さかさに操ろうとする、すべての動きを排除し、思想の自由のもとに、高度な意識で自己の確立にアプロイチでき、しかも、今後のあるべき大学の理想を見出せるような、研究室でありたいと、筆者は願っている。

学 生

現在、日本農業斜陽化の中で、我国の畜産は急速に発達し、そして今後も急ピッチで伸展する事が期待されている。しかし、飼料費の示す割合が先進諸国と比較してみると著しく高い事も我国の畜産の現状である。又、近年食生活改善に伴なって畜産生産物の需要は増大の傾向にある。それに対応して、これからの家畜の資源としての飼料は大きな問題であり、家畜の飼料の確保は、将来の畜産において最も重要な課題となっている。このような課題を目標として日夜研究に励んでいるのが我が飼養学研究室である。

昭和四十六年度 卒業論文題目

- 伊藤 一紀 石英投与が産卵鶏に及ぼす影響、消化率について
- 上原 康忠 アミノ酸錯体の家禽における栄養学的研究
- 小野寺則文 石英投与が産卵鶏に及ぼす影響、産卵成績について
- 大田 勝久 高冷地の牧草生産に関する研究、土壌の構成差異が牧草の生産性に及ぼす影響について
- 木村 隆 長水路による汚水処理の研究
- 金原 泰雄 汚染環境(特にアンモニア並に炭酸ガス)の鶏の生体に及ぼす影響について
- 北林 強 火炭腐殖質土の草地における牧草の生産増進に関する試験研究(福島市東牧場で実施)
- 栗城 理 長水脱流水の酸素吸収に関する研究
- 小池 正員 L-プロリンの培養細胞に及ぼす栄養学的影響、培地中のL-プロリンが培養細胞増殖に及ぼす影響
- 代田 健一 家禽栄養における非必須アミノ酸の研究、プロリン補足にともなう食餌カリウムの変動が幼雛血液中遊離アミノ酸に及ぼす影響

ここで研究室の構成、特徴を簡単に説明したいと思う。我々飼養学研究室は、動物栄養学の専門である杉村先生、家畜管理学の専門である伊藤先生とそして栗原先生の三本柱によって支えられ室員総勢五〇名の学生によって構成されている。当研究室は個人の主義を尊重し伸ばさうという処に特徴があり、研究室内で伸び伸びと自由な雰囲気によってつまれている。反面研究室は、学習の場として提供され、前に述べたように室員が多いためかやる気のない者は置いていくという主義であり、ある一面においては非常に厳しい研究室である。以上が研究室の特徴である。

現在、主として当研究室で行なわれている研究内容は次の通りである。

- 幼雛における非必須脂肪酸に関する研究。
- 家禽における非必須アミノ酸に関する研究。
- 石英投与が産卵鶏に及ぼす影響。
- 家畜における抗生物質の投与に関する研究。
- 牧草の生長に関する研究。

清田 幹男	石英投与が産卵鶏に及ぼす影響、石英の消化管内滞留について
高橋 博	カロリーとタンパク質のレベル変化に伴う L-Proline の栄養評価に
高橋 勝孝	幼雛における必須脂肪酸に関する研究、飼料中レベルの差異が体筋に及ぼす影響
内藤 勲	幼雛における必須脂肪酸に関する研究、飼料中レベルの差異が利用率に及ぼす影響
苗川 博史	飼育下におけるマウスに及ぼす過密状況の影響に関する動物心理学的研究
中野 正夫	家禽栄養における非必須アミノ酸の研究、幼雛における L-アラニンの利用
成田 秀夫	競争馬の栄養に関する研究、特に出走時の栄養管理について
平沼 潔	幼雛における必須脂肪酸に関する研究、飼料中レベルの差異が肝臓に及ぼす影響
藤田 義美	飼料作物栽培における鶏糞施用限界に関する研究
矢那瀬利広	家禽栄養における非必須アミノ酸に関する研究、L-トリプトリンの補足に伴う食餌カロリーの幼雛筋肉中遊離アミノ酸の影響
吉川 清	食餌中の非必須アミノ酸の理想比の追求、L-Hydroxy-L-Pro. の過不足による雛器管中の遊離アミノ酸量の変動

畜産経営学研究室

室長

吉沢 昭夫	岐阜県数河高原種倉入会地における野草の飼料価値と肉牛肥育の有為性
小笠原治幸	飼料中の添加抗生物質の残留に関する研究、SP製剤の残留と消失に関する実験
斉藤 俊雄	飼料中添加物抗生物質の残留に関する研究、SP製剤の鶏卵内残留量に関する実験
高井良克正	アメリカ野牛の育成実験
沖 芳夫	アメリカ野牛の育成試験

研究は、すくなくとも学界には存在しない。これは一般経営学における現在の実態であるが、畜産経営学の分野でいえることは、新しい一つの方向として、経営経済学的研究と経営社会学的研究の総合、経営経済学的研究と経営科学的研究の統合によって、より実在に即して研究が進められつつあることが指摘できよう。

そこで具体的にどう考えたらよいかということになるが、日本の畜産が今後どのように展開していくかということの認識が先づ前提になる。この問題の把握の仕方は、日本経済の一環としての農業の位置付け、畜産の位置付けから始まり、外国の農業、畜産との関連を分析することによって、総括せねばならない。そこから打出されるべき農業（畜産）政策から要請される畜産経営学の在り方ということになってくる。ところが、政策は、本来国が打出すべきものであるが、残念ながら、明確なものがない。しかし、社会的要請から、今後の畜産経営は、企業化、農業資本の共同化（農協をインシエーターとするインテグレーション）、諸公害防止の上に立って進めねばならないとなると、一応そのような問題を研究することも不可避の状態になってくる。

ここで一考してみることが、科学する者の態度である。社会的要請の問題は広く農学全般にわたって考えねばな

らなく、（農学のビジョンということになる）畜産経営研究の問題としても、きわめて重大であるが、この面だけが研究のすべての分野とはならない。われわれの研究が、細分化され、一人一人志す分野が異ってもかまわないのである。一つの思想に限定される必要もなく、経済学的研究をするならば、研究方法が、マル経であれ、近経であれ自由でなければならぬ。そこで研究者の認識としては、自分の研究の分野が経営経済的研究か、経営科学的研究か、経営社会学的研究の何れの分野に属するものであるかについて明確にしなければならぬ。

ところが明確にできない関連領域の分野がある。たとえば、畜産公害に関する問題など排泄物や汚物処理についての化学、施設施工の建築学、装置についての電気学、社会生活上の公衆衛生学そして基本となる家畜管理学等の総合による、研究分野であり、既成の畜産学の領域をこえた分野である。このような分野についての研究は、学生の自主的セミナーを中心としての、資料蒐集、見学、実習等を通じて進めねばならないと思う。

現代の我々の経済生活は常に他のいろいろな要因の相互交渉のもとに完全に営むことができるのである。日本経済の中の農業、そして農業の中の畜産・その中にあって畜産経営も複雑に隔合した現代社会の一パートとしているのである。

我畜産経営学研究室はいかに畜産をとらえ、そしていかに現代社会に適合させるか、つまりマクロ的見地からの経済を考え、ミクロ的見地からの技術を考え、この両者を隔合させて「より合理的なものの追求」ということを根本理念のもとに。明日の日本の畜産界を背負って立つという使命感をもって当研究室は吉村、小杉両先生を中心に五十三名のメンバーで構成されており、その中は四分化会に分かれており、養鶏、養豚、肥育牛、酪農班があり、室員諸君は、これらの一つに所属し将来のスプレヤリストめざし一日夜研究にはげんでおります。年間活動状況を述べるならば、まず桜花乱満の四月には未は社長か農林大臣それとも村の村長さんをめざして勉強するために胸一ぱいにはちきれんばかりの豊富を持ってやる気充分の三年坊主が入室、そして新入室員歓迎会で

景気をつけてスタート、ある時は実地見学、ある時は農林省、外国大使館、またある時は文献あさりともまぐるしく活動するのである。そして夏休みになると自分の手で実際に調べないと納得しない連中は夏休と同時に「まってました」とばかりに畜産経営の実態を知るために地方にふっ飛んで行きます。そこにおける一定地域の個々の農家の経営内容の資料を集々、中には娘さんの実態調査をして来る人もいるとか、こうして集めた資料を大学にもち帰り調査表の集計を行ない損益計算書を作製する、更に調査表、損益計算書をもとにして飼料要求率、飼料経済効率、肉飼比など、この出て来た指標の数値をもとにして経営状態を診断するわけである。この分析を通して現実と理論の異なりの実際を見ると同じに今後の我々の研究の基礎となるものである。

昭和四十六年度
卒業論文題目

- 有田 英行 国民所得の推移における消費構造の変化について、主として畜産物について
- 池添 博正 鹿児島県下における畜産界の現状と将来

遠坂 修一 養豚一貫経営の現状と諸問題点についての検討

加藤 恒雄 複合養鶏の経営経済的研究

国富 孝 岡山県における養鶏の現状と将来

佐藤 敬史 群馬県の畜産における肉牛の位置

坂本 智成 草地利用による肥育牛経営の経済性

島崎 博 畜産公害の経営的限界、養豚農家の意識について

田辺 信行 肉牛経営の動向と問題点について、特に山形県の場合

高橋 求 肥育牛の生産費に関する研究、(特に素畜価格の経営採算限界について)

竹内 勉 北海道池田町における畜産経営の実態について

土屋 英次 畜産目的SPF豚の経済性について

飛松 武夫 近効酪農における経営設計、特に神奈川県の場合

中島 輝明 大規模養鶏経営の設計上の諸問題と安定経営の追求

長谷川良照 養鶏経営における強制換羽の取り入れ方とそ収益性

原口 克巳 埼玉県下における酪農経営設計の試案

広沢 安正 飼料生産の経済性と酪農経営について

古谷 正剛 養豚の肥育経営と一貫経営の設計上の経済性について

松本 政義 島根県下の肉牛の位置と経営設計の私案

松本 祐 酪農経営における労働性向上に関する研究

三好 良一 採卵養鶏の家族経営における適性規模とその収益性について

山谷 文雄 北海道におけるブロイラー養鶏の現状と将来性

山本 英雄 日本畜産の適地適産に関する研究

吉田 幸雄 酪農における飼料の給与基準と経営経済的考察

浅利 悦男 北上山系開発における肉牛生産の展望

実川 正信 神奈川県における酪農の変遷

山崎 邦彦 大規模養鶏経営における比較有利性を構成する要因について

肉(卵)利用学研究室

室長

肉卵の利用は急速に増大しつつあり、これの加工品の製造技術も進展してきたが反面、幾多の問題が山積みしつつある。これらの問題を解決しつつ良質安全なる加工品を提供、更にこれを進歩させ人類の栄養向上に寄与する事が必要である。肉卵利用学の専攻は技術者として深い理論と高度の専門技術の研鑽と豊かな一般常識と国際的視野と創造力、協調性のある人物の養成を目的としている。この為に基礎的実験実習を基盤として社会の技術的な進歩に遅れないような研究、技術を修得せしめる。そこで当研究室としては

- (1) 肉卵の組成、性質及び貯蔵に関する研究
 - (2) 肉卵加工上の諸問題に関する研究
 - (3) 加工品貯蔵に関する研究
 - (4) 肉の鑑別、熟成程度の判別に関する研究
 - (5) 新製品製造に関する研究
- 等のテーマを中心とし社会的要請に及び更にこれの進展に貢献すべく努力している。研究室員は、一家族であ

り、家族的な雰囲気の中で和、誠心、忍耐、努力をモットウとし楽しく勉強し、研究し、語り合いながら目的に向って活動していただく。これより円満な協調性のある知識、知性のある技術者が養成されるであろうと確信している。螢光灯の点った実験室で分析にゼミナールに余念のない室員達を見るにつけ自然化学及び人間形成へアプローチしつつあるのだと感動する。科学の進歩に貢献し、置去りにされない社会を築く層もここから出るであろうと信じているものである。

学生

肉研は四年生が一六名、三年生が一二名、そして鬼原助教授、松岡助手の計三〇名で構成されている研究室で丁度よい人数ではないかと思っている。
肉研の正式な名称は畜産物利用学(肉)研究室と言う。一見この名称から感じとられることはハム、ソーセージなどの肉製品ばかり製造していると思われる人がいるだろうが、実際には実験室で肉の脂肪含量、蛋白質含量などの分析や肉の保水性などの基本実験から肉の発色剤やその他諸々の応用研究を行っている方が多い。最近特に

『肉の発色剤の成分中に発ガン性物質が入っている』と学会などで騒がれている事は皆さんもマスコミなどにより御承知と思いますが、我々肉研においてもこの問題を即座に取り上げて、いかにしてこの発ガン性物質を使用せずに肉の発色が出来ると言うことに取り組みたいです。

以上が肉研の実験及び研究内容であるが、又、春と秋に研究室で旅行を行なうことも行事の一つである。これは単に旅行と言っても遊びのための旅行ではなく研修のための旅行であり、ハム工場などを見学し自分達の知識を豊富にしていくのが目的である。

昭和四十六年度 卒業論文題目

- 朝川 雅彰 燻煙鶏の保存性について
- 石蔵 隆雄 シの品質及び保存性について
- 糸川 佳男 卵白、卵黄への食塩の浸透について
- 加藤 高義 鶏の脂肪酸組成に関する研究、胸筋、腿筋中の脂肪及び貯蔵、脂肪について
- 桐ヶ谷文雄 鶏肉の死後変化に関する研究

乳利用学研究室

室長

農業生産物の加工・利用・化学的研究が、ともすると、

- 小口 義博 肉のPHと食塩の浸透との関係について
- 小林 雅一 豚背最長筋におけるミオグロビン含量と色調について
- 小林 哲雄 食塩と磷酸塩の鶏肉の保水性への影響について
- 鈴木 真 豚肉の凍結に関する研究、再凍結保存時筋肉の蛋白質に及ぼす影響
- 関 則郎 豚肉の凍結に関する研究、再凍結保存時筋肉の品質に及ぼす影響について
- 高山 明久 鶏肉保存中脂肪の変化に関する研究
- 竹内 善博 高温塩漬時の *Ordered Heat Coolor* とSH基の関係について
- 平尾 憲二 鶏肉の死後蛋白質の変化についての研究
- 真崎 邦夫 マトン肉みそ漬時の変化に関する研究
- 増田 吉春 卵黄の凍結保存中の変化について

農芸化学を修めた人達の努力によって、発達したもので、今日の食品工業を育てたとする考え方が、食品を志す人々の間に多い。さらに近時、これが多くの食品工業にあって、農芸化学だけでは微力である、との考え方すらある。

これらの考え方は、確かに一つの理論であるし、また正しい事かもしれないが、いたずらに食品工業の発展のみを願って、その基礎となるべき研究開発が、おろそかになっていないであろうか……。

食品の本当の姿をみつめたいものである。

こうした考え方で、乳利用学研究室は運営されている。

牛乳の、化学的な、また物理学的な、そして栄養学的な品質を高めるため、畜産学はなくてはならないものと考ええる。牛乳成分の大部分が、遺伝形質に左右されるという事実から、牛乳の品質向上の基礎に、育種・飼養管理面の改善のある事も事実である。

遺伝形質に影響される、各牛乳成分の改善のための、育種選抜が必要であろうし、乳質乳量に影響を与える、飼料などの改善も必要となる。その上ではじめて、嗜好性の高い乳製品が出来るかと確信する。

乳利用学研究室では、こうした畜産学に立脚した上で、他の食品工業との関連開発と、牛乳の多目的な利用を研究しており、現在主に、粉乳の保存性の改良、チーズ様食

品の開発を中心として、一六名の学生諸君が励んでいる。

こうした研究の中で、自分の研究がまわりの人々の健康維持に、より貢献できるという自覚をもち、この自覚を生み、さらに押し進めて行くため、正義・正直・礼儀・独創・誠実を室員の主な中核として、常々人々の利益のためになっている事を、誇りとしている。

学 生

当研究室は、山中良忠助教授と古川徳助手の両先生と普通室員・特別室員から構成されています。

本研究室は乳・乳製品に関する学問的製造研究並びに室員相互の親睦を計ることを大きな目的としており、その目的の遂行は人間形成とあいまって初めて成しとげられる。という方針に基き誠実・礼儀・規律を重んじ、毎日研究に励んでいます。

室内は室長室・準備室・実験室と三部屋に分かれ、その他、乳酸菌を取扱わず無菌室およびドラフト室があり、研究及び実験には欠かせない器具設備が完備し、図書についても毎月、乳業関係雑誌がはいり、多数の乳及び乳製品についての専門書がそろっています。

当研究室の構成は次の通りです。

○室 長 山中 良忠先生

○助 手 古川 徳先生

○四年生 七名

○三年生 八名

○二年生 一名

昭和四十六年度 卒業論文題目

浅井 賢一 粉乳の貯蔵中における不溶性蛋白質について

小栗 政美 チーズより食品に関する基礎的研究

小野 茂 噴霧乾燥時の粉乳粒子と溶解度に及ぼす蛋白安定剤の影響

林 順一 滅菌濃縮乳の貯蔵中の変化について

前田 一美 豆乳の製造に関する研究

柳川 幸司 大豆蛋白質添加カードの酸生成に関する一考察

大内 敏樹 ワルシー牛乳より飲料の製造に関する基礎的研究

また乳製品製造実習は、総合農産加工実習所であり、市乳処理、バター製造、チーズ製造、練乳粉乳製造及び酸乳飲料製造など、各々の処理機械を用いて行なっています。

なお、現在の乳研の全構成員数は、両先生を含めて、一八人と少数ですが、それゆえにお互いが気心の知れあつた家族的構成をつくりあげています。

そして春における新室員と在室員との親睦旅行・夏のゼミナール旅行はとても楽しいものです。

本学卒業で乳業に従事している方々の親睦会である、楽乳会の事務取り扱いを通じて、先輩諸兄の御指導と御鞭撻をいただいています。

当研究室の主な行事

○ゼミナール

○新入室員歓迎会

○春の親睦旅行

○夏期乳製品製造実習

○夏のゼミナール旅行

○秋の研究発表

○卒業論文発表会

○卒業生送別会 等々

東京農業大学畜産学科 畜友会規定

昭和四十三年十二月十八日一部追加

第一章 総 則

- 第一条 本会は東京農業大学畜友会とする。
- 第二条 本会は東京農業大学在学学生、教職員、および卒業生をもって、相互の親睦をはかり、本学の発展に寄与することを目的とする。
- 第三条 本会の事務所は、東京農業大学畜産学科本部におく。

第二章 会 員

- 第四条 本会の会員は左記の三種をもって組織する。
- 一、正会員 二、特別会員 三、名誉会員
- 正会員は東京農業大学畜産学科在校生。特別会員は東京農業大学畜産学科卒業生、並びに教職員。名誉会員は役員委嘱により承認を得たもの。
- 第五条 会員が本会の業務執行妨害あるいは名誉を

失せる行為をした時は総会の議決により除名する。

第三章 役員及び機関

- 第六条 本会は左記の役員をおく。
- 一、委員長一名、副委員長二名 書記二名 会計一名 会計補佐一名 渉外二名 企画三名 庶務二名
- 二、一年クラス委員四名、二年クラス委員二名 研究室委員七名
- 三、監査員四名
- 第七条 本会は顧問をおき、畜産学科長ならびに畜産学科主事が此の任にあたる。
- 第八条 委員長、副委員長、書記、会計、渉外、企画は正会員の中より総会において計十一名選出する。
- 委員は一、二年二名、各研究室一名ずつ、監査委員は各学年一名ずつ選出し、欠員が生じた場合、速やかに補充しなければならぬ。
- 第九条 役員の任期は原則として一年とする。
- 第十条 総会は正会員より構成され、本会の最高決

議機関とする。

第十一条一、総会は正会員の三分の一以上より成立する。

二、委任状は署名捺印（拇印を含む）を必要とし、議長に一任する。

三、委任状は総会に際し定足数に含まれ委任状の数は制限しない。

四、委任状の検査は役員が行う。

五、本条文は昭和四十三年十二月十八日をもって追加し即日効力を発する。

第十二条 定期総会は年一回十一月に召集する。

臨時総会は左記に該当した場合一カ月以内に召集しなければならぬ。

一、正会員の四分の一以上の同意を得て、開催目的及び召集理由を記載し委員長

に提出あるとき。

二、役員の上二分の二以上が必要と認めたらぬ。

第十三条 総会の開催は五日前に公示しなければならぬ。

第十四条 総会における議長は、総会においてその都度互選する。必要に応じて議長は副議長を

指名する。

第十五条 総会の議決は、出席者の過半数によって議決され、可否同数のときは、議長の決するところによる。

第十六条 総会の過半数により、役員の不信任を可決できる。

第四章 業 務

第十七条 第六条第一項、第二項に定められた役員は本会の最高執行機関たる委員会を構成し、この召集を委員長が行なり。

第十八条 本会の事業年度及び会計年度を、十二月一日より翌年十一月末日迄とする。

第十九条 本会は左記の業務を行う。

- 一、会員親睦会
二、講習会及び研究発表会
三、見学調査
四、機関紙の発行
五、その他第二条に附帯する業務

第五章 会 計

第二十条 会費は年間七五〇円とする。その納入は四

行事報告

— 畜友会 —

- S 45 12・10 畜友会総会 — 現役員 選出される
- 12・26 役員合宿 (年間方針について)
- 30 役員合宿 (年間行事について)

- S 46 1・20 四年生追いだしコンパ
- 2・27 畜友会役員春季合宿
- 28
- 4・21 新入生歓迎映画会
私は貝になりたい) 参加1年生約80人
水田に草を作る人々
- 4・30 新入生歓迎バスハイク
マザー牧場へ行く 1年生中心に2.3.4年 約100人
- 5・13 研究室問題における事情聴取
- 14
- 5・22 講演会 農工大教授 柳下 登 氏
- 6・5 映画会 (24のひとみ) 参加者 約200人
大地
和牛の肥育
- 6・12 公開質問状学科本部に提出
- 6・18 畜Ⅰ クラスコンパ 参加者 約60人
- 6・22 畜Ⅱ “ “ 約100人
- 6・28 映画会 {人間の壁
29 { 養豚の映画
- 8・28 } 夏季役員合宿
- 29 }
30 }
- 9・12 収穫祭実行委員会設立
- ↓ 収穫祭実行委員会：具体的に動き出す
- 11・5 収穫祭終わる
- 10・20 映画会
{ 安保条約と日本農業
11 { 食管制度と私達のくらし } 参加 十数人
- 11・13 ふじみのの実行委員会設立
- ↓
- 12・4 総 会

カ年分一括し、入学金と同時に大学会計窓口を通じて納入のこと。
但し転入者は転入年次より正規の手続きを経て一括納入する。
第二十一条 本会の運営は会員の納入する会費で運営する。但し第十九条の業務執行にあたり臨時徴収する場合もある。
寄附行為は認める。
第二十二條 納入金の払い戻しは行なわない。
第二十三條 決算報告は十月末日までに作成し公示する。承認は定期総会において行う。

第六章 監 査

第二十四條 本会の業務の円滑、正常化する為、監査委員をおく。
第二十五條 監査委員は、前条の目的達成の為年度末に会計監査を行う。監査は監査委員が必要と認めれば随時できる。
第二十六條 監査委員は番六条第一項、第二項の役員の兼任は出来なく。

第二十七條 本会規定解釈の疑義は委員会において、最終的解釈する。
第二十八條 本会規定の改正及び追加は総会においておこなう。
第二十九條 本規定は昭和三十五年六月二十九日より施行する。

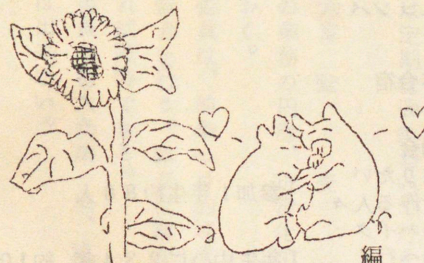
(注) 二年クラス委員四名と訂正

編集後記

現在の畜産は、自由化・公害等の大小さまざまな問題を抱えています。

私達は、この問題を解決するのに少しでもこの「ふじみの」が役立つ事を望みます。

又、発行が大変遅れた事をここにお詫びする次第です。



編集員一同

昭和47年1月31日発行

発行所 東京都世田谷区桜丘1-1-1

“ふじみの” 第11号

東京農業大学畜友会

電話(420)2131(呼)

編集責任者 坂西邦人

印刷所 エルデ・タイプ社

発行者 畜友会

電話(429)1067

